557
1

始

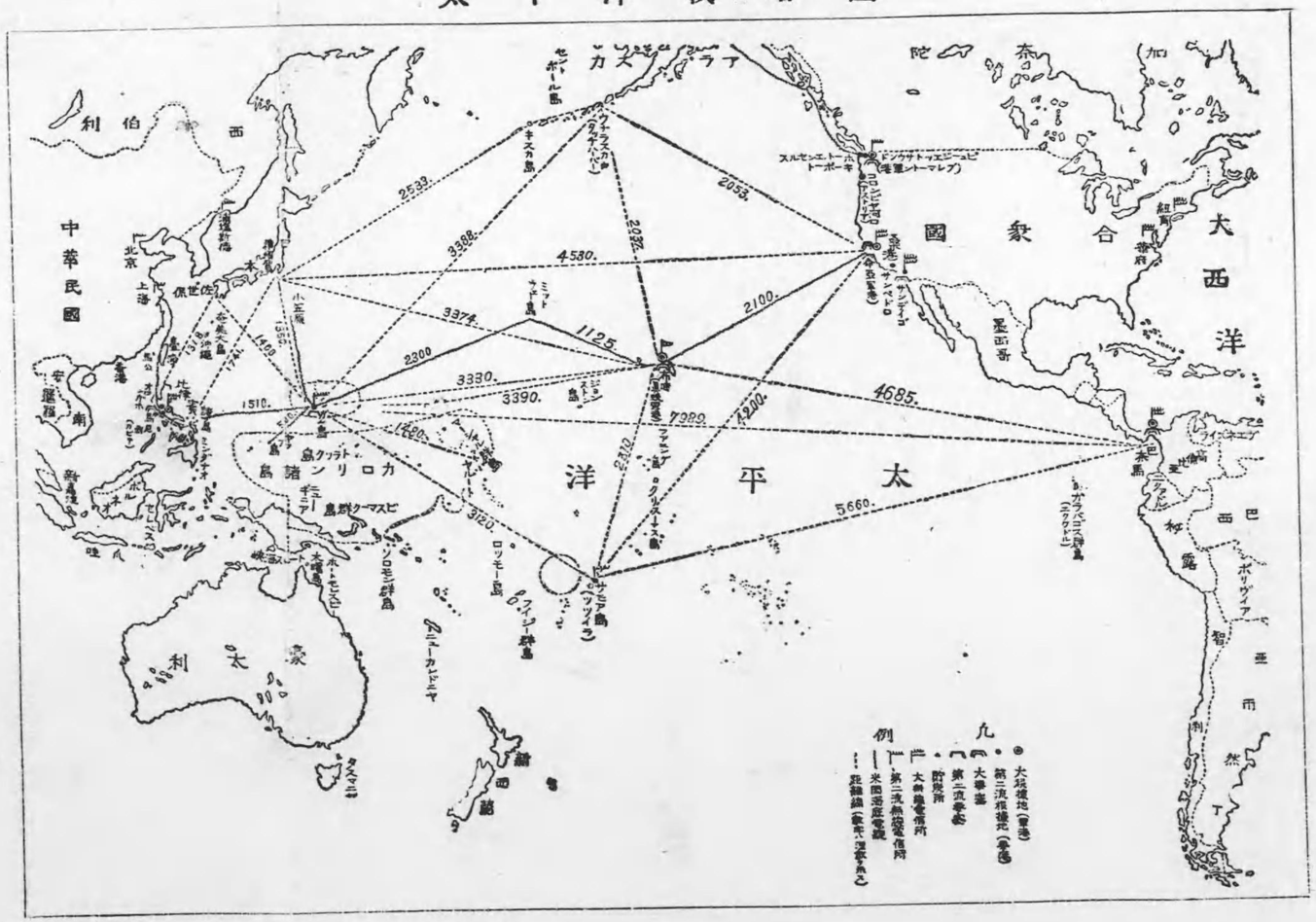
ト24T-22

太平洋戰爭（バイウォター）と其批判

石丸藤太譯並評

大正
15. 2. 10
内交

太平洋戰略圖


カムチャツカ
セバストポール島
ウィラスカ島
アリューシャン諸島
ミッドウェー島
ハワイ諸島
ジョンストン島
ウェーク島
ガラパゴス諸島
ニューカレドニア
ソロモン諸島
ロッモー島
フィジー諸島
サモア島
ニュー
ギニア
ビスマルク諸島
ボーナビル
ラバウル
ポートモレスビー
ダーウィン
タスマニア
豪太利
中華民國
北京
上海
佐世保
小笠原
ハルビン
新京
奉天
安東
南京
香港
海南島
新嘉坡
ジャワ
ボルネオ
セレベス
ニューギニア
ビルマ
印度
西伯利
奈陀
加
紐育
ワシントン
墨西哥
合衆國
大西洋
太平洋
巴西
ボリヴィア
智利
亞米利加
西印度諸島
2533.
3388.
4580.
2053.
2092.
2100.
3374.
1125.
2300
3330.
3390.
1510.
1620.
7990.
1200.
4685.
2310.
3120.
5660.
例
大規模地（要港）
第二次根據地（要港）
大要塞
第二次要塞
防禦所
大無線電信所
第二次無線電信所
米國海底電線
英國海底電線（英米共同敷設）

554-81

譯者序

本書は最近世界の讀書界を驚倒せしめつゝある英國の有名なる海軍評論家ヘクトル・シー・バイウオーター氏の近著"The Great Pacific War. 1931——1933"を全譯して、之に譯者の忌憚なき詳細なる論評を加へたものである。

余が本書を譯述論評するに就ては豫め一言すべき必要がある。之より遡き大正十三年七月米國に於ける排日移民法案議會を通過し、大統領クーリッヂ氏の署名する所となりて我國論沸騰するや、余は非才をも顧みず『日米戰爭日本は負けない』を公にして、種々の方面より米國の必ずしも恐るゝに足らざるを切論し、以て我國民に警告する所あつた。然るに拙著は內外に對して多少の反響を與へたる物の如く、未知の人士より書を寄せて余の立論の主旨を共鳴鼓舞せらるゝと同時に、我海軍外務兩省にも、內外人より、余及余の立論の如何を問合せられたる向ありしを耳にして居る。それ

かあらぬか英國に於ても、バイウオーター氏は今次の『太平洋戰爭』を著すに當り、少くも拙著を參考としたる物の如く、同氏が其序文にも云へる如く、『太平洋に於ける將來の海戰に關して、日本に於ても最近の數年間少くも二つの著書出版せられて居る』と云へるは、海軍大佐水野廣德氏著『次の一戰』並に拙著を指すものなるは、バ氏著書の內容を檢覈する者の首肯し得る所であらふ(川島淸治郎氏著『日米一戰論』は發行遲かりし爲め恐らく未だバ氏の手に入らざりしには非るか)されば余がバ氏の著書を論評するは寧ろ當然の因緣とも云ふべく、余の双肩に擔へる責務なりとも解するを得よう。これ余が特に詳細に本書を批判して、一は以て日米戰爭の性質に關するバ氏の所論を正し、一は以て動もすれば日本を誣ひんとする氏の僻論に對して我國民に警告せんとする所以である。

バイウオーター氏は抑も如何なる人なるか？　氏は英國に歸化せる米國人を父母とする者で、相當の年輩に達した後は米國の土を踏んだことなく、最近には倫敦の郊外に居住して、英京に於て發行さるゝ『海陸軍雜誌』の主筆をして居る。されば米國の有數なる新聞記者某氏が氏を評して、『米國人の如き英國人で、同時に英國人の如き米國人なり』と云へるは頗る適評であるかも知れない。蓋し氏從來の所論を讀む時は常に米國に有利なる如き論說を揭げて、結局は英國に有利なる如く、巧みに其結論を隱蔽して居るからである。

氏は知名の海軍評論家たると同時に國際問題の研究者である。其特に名聲を馳せたのは、華府會議前に公にした『太平洋海權論』で、着眼の犀利なると、海軍に關する智識の該博なるとを以て、一躍して英國に於ける有名なる海軍評論家となり、アーチバールド・ハード氏やアーサー・ポーレン氏の如き軍人以外の海軍記者と共に一流の所に位する者とせらるゝに至つた。而して今次公にした此『太平洋戰爭』の如きも、氏の前著『太平洋海權論』を小說の形で書き現はしたものである。

氏は前說せる如く海軍評論家たると同時に國際關係の研究者であるが、不幸にして其所論は日米問題を主とし、其他に就ては觸るゝ所甚だ少ひので、動もすれば其所論の偏狹にして大局に通ぜざるの嫌あるは氏の爲に惜む所である。斯くて氏は大正十一年八月以來米國のバルチモアー・サン紙を根據として、海軍の智識なき民衆を迷はするに足る筆鋒を以て、頗る不公平なる論據の下に日本の補助艦政策を非難し、或は自己主宰の英國『海陸軍雜誌』や、米國のアトランチック・マンスリー誌上にも其毒筆を揮ひ、又華府會議後に發表した『華府會議の結果』と題する論文中には、日本が同會議に先ち、急速に小笠原島の築城を進めたりと論じて、日本の不信を世界の面前に攻擊したるが如き、全然虛構の中傷的毒筆を揮つて居る。氏が米國海軍省に買收されたるや否やは今玆に論ずる限りに非るも、米國の民衆に向て日本の補助艦計畫の過大なるを盲信せしめ、米國は自衛上是非とも大規模に補助艦を增建せざる可らずとの感念を銘記せしめ、以て其造艦熱を燭

つた功勞に對しては之を認めて遣らねばなるまい。然も氏は猶之を以て足れりとせず、更に今次の『太平洋戰爭』に於ても、日本を、以て補助艦競爭の挑發者なりと誣ひ、最近の英國雜誌『十九世紀及其後』(ナインチンセンチユリーエンドアフター)誌上にも亦同樣の毒筆を續けて居る。

之を要するに氏は故意か、又は他に何等かの理由あつてか、常に排日的言說を弄し、米國の民衆に向て排日熱を煽動し、日米の離間を策しつゝ、英國をして漁夫の利を占めんとせしむるに非るやを疑はしむるに足る者がある。然も氏所論の正邪を看破するの眼識なくして、輕々に之に共鳴する日本人あるに至ては其愚や及ぶ可らずと謂ふべく、其智識の淺薄なるを憐まんよりも寧ろ我國民を蠱毒するの大なるを思ひ、國家の爲め深憂を禁ずるを得ない。

然らば此『太平洋戰爭』に於ける氏の所論は如何？　抑も亦氏が之を公にするに至りし眞意は如何？　前說せるが如く本書は氏の前著『太平洋

海權論』を小說の形で書き表はしたもので、普通の小說とは異なり、或程度の範圍內に於ける合理的可能性を有する具體的のものであるので、少くとも日米戰爭の性質を解するに足る豫想記とも稱すべく此點が一片の架空的小說と異る所である。然しながら其所論を見るに、始めより日本の戰敗を豫想し、又は戰敗せしめんとして豫定の筋書を辿つて居るから、日米戰爭未來記と云ふよりも寧ろ日本を負かせるを目的として書いたと云ふのが至當であらふ。されば其叙述に無理があり、專門家をして顰蹙せしむるものあるは已むを得ない事である。

第一に氏は日本を不利ならしめんとして、開戰の原因及動機を誣ひ、國內に於ける不穩分子を煽動し、又國外に於ける善隣國との關係を惡化せしめて、日米戰爭に乘じ此等の諸國が何を爲さざる可らざるかを暗示して居る。加之ならず日本の採れる作戰手段に至ても、故らに不合理な方案を撰んで日本を敗戰に導て居る。

第二に氏は米國を有利ならしめんが爲め、無暴なる作戰の實例を示して米人を警醒し、又日本が採ることあるべき作戰を指摘して、從來稍もすれば無關心の態度を取れる米國の民衆を戒め事前の準備の一日も忽にす可らざるを警告して居る。然も米國に不利なる國內事情並に外國との關係に至ては一切之に觸るゝを避け、特に日米戰爭の場合、有形無形に米國を援助すべしと思はるる英國の態度に關しては一言半句も說く所が無ひ。

第三に氏は米國の富力、財力物力の無盡藏なるを力說して、日本の到底米國の敵にあらざるを日本國民に知らしめ、依て以て日本人をして日米戰爭の無益なるを知らしめんとして居る。勿論氏は米國民に對しても、戰勝の必ずしも物質的利益を齎らすものに非るを述べて居るも、前後の關係よりすれば、氏の眞意は日本人に日米戰爭無益論を鼓吹するにあるものと思はれる。

果して然らば本書著作の眞意が何れにあるやは、賢明なる讀者の必ずや

洞察せらるゝ所であらふ。これ或は餘りに悲觀的觀察なるが如きも、氏從來の所論と比較して、本書が何等進歩の形跡なきより見ればこれ亦已むを得ない。而して譯者が之に詳細なる論評を加ふるの眞意も亦玆に在る。

遙莫本書が幾多の暗示を含み、日米兩國民には素より、之を繞りて密接の關係を有する他の諸國民にも豫言的洞察を附與せらるゝこと少くないのは、氏に向て感謝せざるを得ない。其說の是非善惡は兎も角として、之を善用利用する所に禍を變じて福となすべき我國民の責任がある。

由來日本國民は平和を愛好する者である。我同胞は國家の死生存亡が脅かさるゝ最後の場合迄は、劍を拔かざるを二千五百年來の傳統的精神として居る。されば日米戰爭は若し實現の機會ありとすれば、對手國の挑發する場合の外これ無きを確信するも、さればとて日本はバ氏の畫けるが如く然く容易に戰敗するものに非るは余の堅く信じて疑はざる所である。

玆に於てか眞に世界の平和を念とせば、一切の假面を脫して、日米戰爭が結

局に於て勝敗なき一種の疲憊戰に過ぎざるを、日米兩國民に知らしむるにある。若しそれ輕々にバ氏の所說を信じて我帝國の前途を悲觀する者あらば、そは賢明なる霞ヶ關の諸公と忠勇なる我海陸軍人とを侮辱する者である。

大正十四年十二月

東京市外巢鴨の寓居に於て

譯者識す

原序

本書は日米戰爭の未來記なるも、斯樣な戰爭が切迫し、又は避く可らずとの意見を支持せんが爲に書けるものでない。勿論日米兩國間には移民問題の如き危險なる分子があり、又極東に於ける米國の商權擴張に伴ふ衝突の原因も伏在することは無論であるが、さりとて目下の所では太平洋上には殆んど暗雲が無ひ。然しながら日米戰爭なるものが幸にありさうにもないにせよ、之をして全然不可能なるものと考へることは出來ない。

余は前者『太平洋海權論』(Sea Power in the Pacific) に於て、日米戰爭の場合、米國の當面する戰略上の困難なる諸問題に就て可なり詳細に論じて置ひた。此等戰略上の諸問題が特殊の性質を有することは、海軍士官には勿論早くから解つて居たのであるが、一般社會は該書に依て相當大なる興味を喚起したものと見へた。茲に於てか筋途を尙一層發展せしめんが爲には、之を

小說の形に於て書くことが必要となつた。

本書に於ては余は、日米兩國は距離の關係があり、且米國側は西太平洋方面に海軍根據地を有せざるにも拘らず、兩交戰國の主力艦隊は互に觸接するを得て、決戰を爲すことが出來ることを說明せんと努めた。日米兩艦隊は互に數千浬の太洋を隔て中間に補給根據地を有たないので、遂に交戰距離に入ることが出來ないと云ふ、只だそれたけの理由よりするも、日米戰爭は全然問題にならぬと論ずる者も少くない。然しながらこれは恐らく謬見と云ふべく、そは讀者が本書に就て見らるゝ通りである。

余は此の未來戰の戰略的行動及其對的抗行動を豫想するに當ては、合理的なる可能性の範圍內に於てのみ之を試み、劇的效果を賦與せんが爲に事實を犧牲に供することを敢てせなかつた。例へば日本の主力艦隊を布哇は愚か、遠く米本國の海岸にまで進出せしむる事も容易であらふし、更に一歩を進めて、日本の陸軍全部を桑港に上陸させ、太平洋沿岸地方を席捲せしむることも書けば書けぬではないが、斯る叙述は徒らに具眼の士の嘲笑を招くに過ぎないであらふ。

專門家は余の畫ひた小笠原遠征を目して、海軍戰略を無視せる無謀の行動として之を否認するかも知れない。併しながら余は此種の計畫は、之を千九百十四――十八年の世界大戰中に、專門の戰略家等が眞摯に建策した或種の作戰に比較すれば、寧ろ危險少く且一層合理的なりと信ずる者である。加之ならず國家の危機に際しては、政治家等は立派な專門家の建策を斥けて最小の犧牲を以て最大の效果を收めんとする事に食指を動かすことは屢々あり得べきことである。

日米兩軍の詳細は、兩國より得たる最新にして且最も信憑するに足る情報を基礎とし、日本の潛水艦は千九百二十四年十一月、同國海軍省の公表した新制式に據つた。其他島嶼、港灣、海峽等は他の地形に關する有ゆる記述と共に細心の注意を拂ひ、又太平洋の或方面に於ける氣象上の影響をも之

を見逃さなかつた。將又本書に現はれた商船の名稱も大部は現實のものを用ひ、遠洋艦潛水艦の通商破壞戰に關する記述も現在の海上貿易と航路とを充分に考慮した。要するに余は全篇を通じて專問的に正確を期せんが爲には有ゆる努力を拂つた。

只だ本書に現はれた人名だけは、其米人たると日本人たるとを問はず、總て假想的で、『眞物』の人物を拉して來ることは一切之を爲さなかつた。

余は有名なる海軍年鑑『列國軍艦帳』(フライイングシップ)の編纂者フランシス・イー・マクマートリー氏に對し、本書著作に當り與へられたる貴重なる援助を感謝す。海事に關する氏の該博なる智識は、一切を擧げて余の利用に委ねられたるが、余が最初の豫定を擴大して、主戰域以外に於ける通商破壞戰及其他の補助的なるも然も有益なる諸作戰に關する數章を增加したのは氏の此の實際的智識の興味に刺戟せられた結果である。

最後に一言すべきは、余の知れる限りに於ては、本書は太平洋に於ける將來の海戰をば、歐洲人の見地より豫想して組立てた最初の試みである、最も此問題に關しては、日本に於ても最近の數年間に、少くも二つの著書は出版されて居るのである。

千九百二十五年四月　　ヘクトル・シー・バイウオーター

目次

第一篇　太平洋戰爭……一

第一章　戰爭の原因及動機……一

一、日本の對支政策……一
二、日米利權の衝突……八
三、日本國內の事情……一三
四、日本政府開戰に決す……一八

第二章　日米國交斷絕……二五

一、戰前の外交々渉……二五

二、米國の亞細亞艦隊……二四
三、巴奈馬運河の閉塞……二七
四、日光丸の拿捕……四四
五、亞細亞艦隊全滅の報到る……五二

第三章　ルーバン島沖の海戰……五六
一、リブレー提督の邀擊準備……五六
二、ルーバン島沖の海戰……六三
三、比島遠征軍の日本出發……七〇

第四章　日本軍の比律賓占領……七九
一、日本軍のリンガエン灣上陸……七九
二、日本軍のラモン灣上陸……八九
三、馬尼剌の陷落……九九

第五章　開戰初頭に於ける日米兩國の兵力並に其戰略的對勢……一〇八
一、日本の海軍力並に其戰略的對勢……一〇八
二、日本の陸軍力……一一八
三、米國の海陸軍力並に其戰略的對勢……一二二

第六章　日本軍のグワム島占領……一三二
一、グワム島の戰略的地位……一三二
二、米國潛水艦運送船のグワム島到着……一三六
三、グワム島に於ける日本軍上陸の失敗……一四二
四、日本軍のグワム島占領……一五七

第七章　グワム陷落後の對勢……一六二

一、グワム陥落後の戰略的對勢……一六二
二、米國通商の打擊と平和論……一七〇
三、日本潛水艦の活躍……一七六

第八章　日露支關係の惡化並に米國沿岸に於ける日本の機雷敷設……一八六

一、日本對露支關係の惡化……一八六
二、戰爭の日本經濟界に及ぼせる影響……一九四
三、米國沿岸に於ける日本の機雷敷設……二〇〇
四、巴奈馬運河閉塞後に於ける米國艦隊の配備……二〇二

第九章　米國太平洋沿岸に對する日本潛水艦航空機の活動……二〇八

一、日本潛水艦の太平洋岸襲擊……二〇八
二、日本空軍の猛襲……二一二
三、米國政府輿論の聲に動かされて戰備を促進す……二三二

第十章　マゼラン海峽戰……二九

一、大西洋艦隊の太平洋廻航……二二九
二、大西洋艦隊マゼラン海峽に入る……二三一
三、日本潛水艦米艦隊を襲擊す……二三六
四、大西洋艦隊目的地に到着す……二四七

第十一章　米軍の小笠原占領計畫……二五一

一、小笠原島の占領計畫……二五一
二、小笠原偵察隊の出動……二六一
三、小笠原遠征軍の組織……二六九

第十二章　小笠原遠征の失敗……二九六
一、遠征軍暴風の爲め大損害を受く……二九六
二、日本潛水艦の出現……二八三
三、日本南遣枝隊との戰鬪……二八八
四、遠征軍布哇に引還す……二〇二
第十三章　米國の新作戰計畫……二〇六
一、米海軍首腦部の交迭と新作戰計畫……二〇六
二、日本の對支高壓……二一六
三、楊子江に於ける日米砲艦の戰鬪……二一〇
第十四章　ロツモウ沖の海戰……二二五
一、日本軍のサモア占領計畫……二二五

二、ロツモウ沖の海戰……二二九
第十五章　日本軍のダツチハーバー侵襲……二四四
一、日本軍のダツチハーバー侵襲……二四四
二、日本の濠州及歐州航路に對する米軍の通商破壞戰……二二九
第十六章　布哇に於ける反亂及米軍のトラツク島占領……二六七
一、日本の二假裝巡洋艦大西洋方面へ出沒す……二六七
二、布哇に於ける日本人の反亂……二七五
三、米軍のトラツク島占領……二八六
第十七章　米軍のヤルート及ボナペ占領並に支那の對日宣戰……二九一

一、トラック占領に對する日本の狼狽……三九一
二、日本の最高軍事會議に於ける意見分離す……三九二
三、巡洋潛水艦名古屋のトラック襲擊……三九八
四、米軍のヤルート、ポナペ占領……四〇六
五、米國の囮船隊トラックへ向ふ……四一〇
六、日本の不安と支那の對日宣戰……四一三

第十八章　米軍のアンガウル島占領……四一九

一、米國囮船艦隊の出動……四一九
二、日本主力艦隊米軍の欺計に陷つて出動す……四二五
三、米軍のアンガウル島占領……四二四
四、日本共艦隊を馬尼剌に集中す……四四〇
五、千九百三十二年（大正二十一年）十月に於ける日米兩艦隊の勢力……四四四

第十九章　米軍のヤップ島擬襲……四五一

一、米軍のヤップ島擬襲……四五一
二、日本主力艦隊の出動……四六七

第二十章　ヤップ島沖の大海戰……四七八

一、米國艦隊の編制……四七八
二、緒戰期に於ける兩軍の空中戰……四八〇
三、主力艦隊の衝突……四八四
四、日本巡洋戰艦隊の奮戰……四八九
五、日本艦隊の退却……四九六
六、大海戰の幕閉さる戰果如何……五〇八

第二十一章　日本の屈辱的媾和……五一四

一、日本の位置絶望的となる……五四
二、米軍のグワム及比律賓奪回……五七
三、米空軍東京の空に勸降文を撒布す……五四
四、休戰より講和まで……五五

第二篇　批判……五九

（附表）日米兩艦隊勢力表……六一

（附圖）……
一、比律賓群島略圖……五五
二、グワム島略圖……一三
三、マゼラン海峽圖……一三
四、太平洋戰略圖……（卷頭）

目次終

上篇　太平洋戰爭

第一章　戰爭の原因及動機

戰爭の原因―日本支那を支配せんとす―支那統一に向ふ―米國の利權に對する日米の衝突―日本に於ける共產主義運動の爲め事態益々紛糾す―國內の困難なる問題を解決すべき一法として日本政府米國と開戰に決す。

一、日本の對支政策

千九百十四年、六月サラエボウに於て放たれた一發のピストルが歐洲の火藥庫に引火して爆發し、遂には全世界を戰亂の渦中に投ぜしめたと同樣に、千九百三十一年（大正三十年）一月五日、日本の東京に投ぜられた一發の爆彈は最近に起つた彼の恐るべき日米戰爭の合圖となり、其反動は未だに

熄まずに居る。抑も此戰爭は日本の總理大臣川村公爵が生涯を通じての計劃であつたので、之が原因となつて其後遂に日米戰爭の幕に迄進んだと云ふ前後の關係は、幸にも今吾人が利用し得る文書を見れば一々之を指摘することが出來る。併しながら之を爲す前に吾人は先づ此の十年來の日本の狀態はどうであつたか、將又極東に於ては何事が起りつゝあつたかを簡單に一瞥するの必要がある。

千九百十四年より同十八年に亙つた彼の世界大戰は、戰亂の渦中に投じた大部の諸國民に非常なる戰禍を蒙らしめたが、玆に少くも一ケ國は富と繁榮を得、且其政治上の勢力を增大した。即ち總ての交戰國中日本のみは此戰爭に依て物質上の差引勘定は債權國となつたのだ。實に日本は此戰爭の四年間に其工業組織は總ての豫期以上に發達し、其外國貿易は四倍となり、又其金貨の準備金は十倍となつた。日本は實際の戰爭には名のみ參加したので、其損害も亦論ずるに足らなかつたが、然るも尙赤道以北に於ける獨領太平洋諸島を得て非常なる利益を得た。加之ならず日本は世界の他の國々が戰爭に熱中して亦他を顧みるの暇なきに乘じて、支那に對しては出來るだけ其機會を利用した、即ち此昔しの帝國の最も豐饒な一部に對しては日本は全然所有者の權利を以て之に臨んだのである。時に支那は私利をのみ事とする黨派の爲に分裂、寸斷、掠奪され、操人形に過ぎざる中央政府と、金を見て動く政治家の一群とは其國庫を慢性的空乏の狀態に置ひたので、東方の剛健なる隣邦日本の蠶食には如何にするも抵抗することが出來なかつた。彼の千九百十五年に支那に對して日本が差向けた二十一ケ條の要求は日本が支那領土の最良なる地域を自己の屬領と爲さんが爲に、如何に其準備を怠らざりしかを示すものである。

此の日本の帝國主義は千九百二十一年迄は何等重大なる反對に逢はなかつた。然るに此年に至り華盛頓會議は開かれ、日本に對する歐米諸國の態度は、たとへ敵意を有せざりしも、日本は日本自身の爲に其對支政策を變

更するの必要あることを此會議に依て日本の政治家に自覺せしめた。斯くて支那に於ける門戸開放の維持並に商業上の機會均等を許與し、又は支那の經濟的資源の開發を援助せんが爲め、幾つかの條約は結ばれたが、未だ幾許ならずして日本は亞細亞大陸に對して要求する其特權を他の諸國にも分たんとするの意志なきことが明白となつた。即ち日本の權内に在る支那の領土内に於ては、外國の勢力を冷遇して之を追出さんとする措置は依然として行はれた。最も其方法に於ては公然之を行ふことを減じ、且一層粗略となつたのである。時々支那に於て爆發する内亂は支那領土内の戰略的諸地點に日本軍隊を駐屯せしむるの口實を日本に與へ、日本の資本家速や商人は南滿洲に於て實際上の獨占權を享有し、加ふるに東部内蒙古に於ては日本は、鑛山、鐵道及工業上の支配的勢力を握つて居た。福建省は未だ嘗て其擴張の手を止めざる日本の勢力範圍内に落ち、楊子江流域の石炭及鐵山さへも其大部は日本に依て開發された。されば一時的の視察者

に取りては、支那は日本の爲に、始めは平和的侵入より後には政治的にも經濟的にも其運命を握らるゝ最後の永久的占領に終るの外なしと思はれた。然るに日本にして此目的を達せんが爲には支那が依然として不統一且無能なる狀態を持續することが至緊至要である。何となれば支那が國家的に統一し、實體としての支那の爲に辯護活動し、要すれば支那國民の利益を防護せんが爲に國家の有ゆる資源を動員し得る樣な强固な中央政府を樹立することは、外國の勢力に最後の止めを刺すことになるからである。日本は這般の事情を熟知して居るので、支那の統一を圖る有ゆる運動には之に同情を示さなかつた、否日本の爲には益々支那内部の不和を釀成して分割政策を採ることが便利であつたのだ。日本は支那の種々な督軍連に秘密に兵器や金を與へて之を援助したと云はれて居るが、此等の督軍連は個人的の反目により國中を絕へず紛亂せしめ、斯くして國家の統一を妨げて居たのである。

斯樣な分裂と混亂とは千九百二十九年迄引續ひて支那を惡より最惡の狀態に墮したが、此年に至り支那の爲には曉星とも云ふべく其名は支那の更新者として子々孫々に迄傳ふるに足る所の學生にして軍人且愛國者たる將軍王楚が現はれた。王楚は若くして米國の大學を出たが、彼の天賦の才能は其在學中に早くも名聲を擧げた。彼は支那に歸るや漢口(ハンカウ)に於て辯護士を開業し、千九百二十九年の初めに起つた內亂の時迄此平和的事業に從事した。茲に云ふ所の內亂とは、山西省より軍を率ひて北京に乘込み、自ら支那の執政者と宣言した都西關の事變に次で起つたものである。王は同年三月一個の義勇兵として北軍に投じたが、指揮官たるに適する彼の軍事的才能は直に現はれた。彼は全然人格の力に依つて指揮者の位置に進み、之より數月にして河江に於て都西關の軍を壞滅せしめた閩將軍の左翼軍を指揮して居た。然るに此戰鬪後間もなく閩將軍は病を得て其職を取ることが出來なくなつたので、北京政府は軍隊の希望に從ひ王楚を其後任

に据へた。此新司令官は直に其精悍を現はした、卽ち彼は敗軍の都軍を追ふて之を攻擊粉碎し、都西關自らは之に戰死した。次で王は踵を廻らし、東洋の戰爭には稀に見る所の速さを以て二百哩間を十二日間に行軍し、當時滿洲の治者にして都西關を援助して居た李平海の軍を攻擊し、之に重大なる損害を與へて潰走せしめた。茲に注意すべきは王は此の初期に於てさへも尙滿洲に於ける日本の勢力に一擊を加へた事で、此日本の勢力には李が結び付いて居たのである。

斯くて赫々たる戰勝を收めた將軍王楚は北京に歸りて政府を其掌中に攬り、同時に中央の命令を拒まんとする他の督軍連を處置するに充分なる自由を與へられんことを乞ふた。彼に好意を表せる時の大總統黃宣は多年其胸中に懷ひた統一の夢が將に實現せられんとするを見るや、各地の督軍に招待狀を發し、北京に集合して聯邦組織の新計畫を熟議せんことを以てし、若し之に從はざれば勇猛なる王楚と共常勝軍とを率ひて之を攻擊せ

しめんことを諷刺した。此諷刺は空しからずして千九百三十年迄に各地の督軍連は北京に來集し、其結果は支那統一の重要なる點に於て協定が成立する迄の運びに至つた。實に遲鈍なる愛國者たる一部の督軍等でさへ、多年の間耐へ忍んだ外國の指揮を消滅せしめ得る前途の光明の爲に勵まされて、茲に支那は革命以來始めて總ての黨派が共同の一目標に向ひ喜んで協力することゝなつた。此共同の目標とは他なし、支那領土の全部より日本の勢力を根絶することである。以上は實に千九百三十年（大正十九年）の年頭に於ける支那の形勢であつた。

二、日米利權の衝突

此時に當り日本は既に自己の全運命、否其眞の生存は、善かれ惡かれ支那の開發と密接な關係を有することを熟知して居たので、此支那の統一的傾向に對しては益々憂慮の眼を以て眺めつゝあつた。日本は支那の資源を

開發するは自己の神聖なる權利と心得た、何となれば日本の工業的機械は支那の礦石なくしては之を運轉せしむるを得ない。之を運轉せしめんには山西、山東並に滿洲の石炭、鐵及鋼を絕へず得ることを必要とするからである。加ふるに日本に於て產出する食料品は益々增殖する其人口を養ふに足らないので、若し支那よりの供給を受けざる時は國民は餓死するの外はない。今や日本の輸入する食料品は全輸入額の三分の一に上り、然も其大部は支那より來るものである。日本は千九百二十六年中山西省內に豐富なる油田を發見し、其優先權を得て以來、其工業及交通機關の組織を石油燃料を基礎とするものに改革したので、若し其供給の杜絕又は障害に逢ふ時は非常なる困難に遭遇するのである。此等の理由により、日本の爲には何物を犧牲とするも支那を握取することが必要で、苟も這般の事情を知れる者は、日本は支那を釋放するよりも寧ろ劇烈なる手段を採ることを疑はなかつた。

併しながら日本が斯く支那に其地歩を固守するには尙他に一の一層緊要なる理由がある。他なし日本は或一强國(米國)と開戰の曉には、支那よりの供給を斷たるれば一ヶ月も戰爭を持續するを得ない、然も支那は多年間日本の暴虐に苦める結果、斯る戰爭にはたかだか惡意ある中立國たる位が關の山であるから、日本が支那よりの物資を指令し得るに非ずんば、亞細亞大陸よりの食料及原料品の供給が遮斷せらるゝは火を睹るよりも明かである。玆に於てか日本の戰略家等が有ゆる手段を盡して隣邦支那の最も豐饒なる地方を固く把握せんと努力せるは誠に理由あることで、斯くせざれば優勢なる海軍力を有する敵の爲に其死命を制せらるゝの恐れがある。然るに支那を自己の實際上の奴隷となさんとする日本の政策は、勢ひ他國の反感を買はざるを得ない、實に日本が明言せる軍國主義的傾向は過去數年間世界平和に害あるものとして猜疑の眼を以て觀られ、極東に於ける他國の利益を無視する其頑冥の態度は、例へ之を改めしめんには、日本の

陸海軍を打破するに足る兵力を必要とする事は何人の眼にも明かなりしにも拘らず、屢々歐米各國政府の抗議を受けたのであつた。抑も日本の地位は頗る强固にして容易に外敵の攻略を許さない、最良なる戰略家等は、日本の戰略的地位を目して敵軍の攻擊に對し殆んど不可侵なりとして居る、何となれば日本艦隊は絶對に西太平洋の海權を管制するを得べく、且同方面に於て日本以外の他國の海軍根據地の缺如せることは、如何なる艦隊も日本沿岸の脅威を不可能ならしむるからである。加之ならず日本は二十五萬の常備軍と二百萬の訓練ある豫備軍を有するので、隣接大陸よりする敵の攻擊を擊退するに充分なる力を持て居る。されば此書の話が始まる千九百三十一年の初頭迄は、亞細亞大陸に於ける日本の優勢なる勢力は他國の利害と相衝突せしにも拘らず、重大なる爭ひを惹起することは無つた、

然るに千九百三十一年の秋季に至り事態を險惡ならしむる一の事件は起つた、卽ち同年九月北京政府は有名なる經育の資本家ワルドー・セイヤー

スを長とする米國のシンヂケートに楊子江流域の上部なる江西省内の緣山の鐵鑛及石炭の採掘權を許與した。該地は米國の探險隊が非常に豐富なる鑛脈を有する物と推定した所である。之に對して日本は北京政府に抗議し、該地方は從來日本の優先權を認められた所で、之を他國民に許すが如きは日本政府の默認する能はざる所なりとした。之に對して北京政府は、江西省は現存せる日支兩國間の如何なる條約又は協約にも、日本の領土として記載しあらざるを以て米國のシンヂケートに斯る利權を許すは支那政府の自由なりと回答した。此回答に對して日本は更に亂暴にして威嚇的なる復牒を送つたが、北京政府は固く持して下らなかつた。斯くて此論爭は一時中止の姿となつたが、其間セイヤース氏は日本の新聞紙が猛烈なる句調を用ひて、江西省内の鐵及石炭は例へ一噸なりとも之を氏又は他の外人に採掘せしむるを許さずと誇言しつゝありしにも拘らず、依然として開發の準備を持續した。

三、日本國内の事情

此時に當り日本に於ては治者の思想が危險なる方向に轉じつゝあつた、日本に於ては既に二十年以前に民衆の間に根柢を下した彼の過激主義の傳播を防がんが爲めに政府は苛酷なる法律を發布したが何等の效を奏せず、人民の大部は共產主義の思想に感染し、組織された勞働團體は政治の改革を叫びつゝあつた。今や舊き制度が變りつゝあることは明かなりしも、此舊制度の代表者等は斯る改革は避く可らざるものとして受け容れんとせなかつた。彼等は正直にも民主政治の出現は日本を滅ぼすものと信じ、斯る改革に服從せんよりも寧ろ極端に之を壓迫せんとした。かの男子に與へられた普通選擧は、自由主義を標榜する幾つかの政黨が多年間無效なる運動を續けた後、漸く千九百二十五年に至り讓與されたが、何人も豫想せしが如く政治の方式にさしたる變化を及ぼさず、專制政治は依然として其

本質を改めなかつた。日本の議會は實際上行政力を有たないので論議を闘はす一の倶樂部に過ぎない。日本を大國の列に加はらしめた元老連は既に消滅せしも、之に代つて軍閥の巨頭連が最高の權勢を握つて居た。此等の軍閥連は革命の陰影が日本を蔽ひ、彼等及彼等の社會的階級が依て以て立つ所の有ゆるものを覆さんと脅かす間は、拱手傍觀する者とは考へられない。數年前亞細亞の事情に精通せる一記者は斯る場合に彼等が如何なる決心を爲すかを豫言して云ふ、『人民若し外國との紛議に夢中する時は、此等の人民は國内事情の苦痛を訴ふるの餘裕も傾向も無いとは日本に於ける政治の根本的原則である。一皮剝げば西洋文明の皮下に封建時代の精神が恐ろしく流れつゝある此等の特權階級者等が、其勢力や最も神聖視する傳統が愈々益々脅かされんとするを見て之に默從すべしとは如何にするも考ふるを得ない。否之に反して彼等は革命と無政府主義の潮流を抑止せんとする手段は、其如何なるものなるを問はず、之を採用するに躊

躇せざるは確實である。嘗ては國内の狀態が然く重大ならざりしにも拘らず、彼等は支那との戰爭に日本を投入するを辭せなかつた。果して然らば目前の事變に際し、同樣の手段を採らずとは如何にして云ふを得よう。愛國心は依然として日本人の長所である。されば國民の善良なる分子が戰爭手段に訴へずんば社會主義者の擾騷が起ると信ずる時、結局戰爭政策を支援すべきは疑ふの餘地は無いのである』と。

余が今說かんとしつゝある時に於ける日本の社會的狀態は前記の評者が豫想した時よりも一層險惡であつた。社會主義の煽動者等は有ゆる工業の大中心地に於て熱烈なる運動を起し、擾騷を煽動する民衆の集會は公然と行はれ、然も警官等は之に對して亦公然と挑戰しつゝあつた。千九百三十年十一月中大阪に開かれた勞働者の集會に演說した有名なる社會主義者渡邊、晉津の二人を逮捕せんとする計畫は遂に暴動惹起の原因となり、數名の警官と二十人以上の人民は之が犧牲となつた。此時群集の激昂は

極度に達し、遂に軍隊の出動となつたのである。翌月渡邊は東京に於て捕縛され、官憲は之を嚴罰に處すべき旨發表したが、之を見たる勞働團體は直に蹶起して挑戰し、憤慨せる集會は國中の有ゆる所に促され、渡邊の即時的釋放と同人を捕縛せしめた內相佐々木氏の辭職とを求むる決議を通過した。然るに此等の要求が拒絕さるゝや、勞働團體の代辯者等は一般的のストライキを起さんことを煽動した。閣員中には首相川村公に向ひ群集の憤怒を緩和せんが爲め渡邊の釋放を賢明の策なりとして建言した者もあつたが、公は斷然之を却けた。主相は此等の一揆と商議することを拒み、法律及秩序を維持するは政府の責任なるを以て、政府は此目的に向ひ有ゆる手段を採ることに決定したと答へた。此首相の回答が公表さるゝや、勞働者中に非常なる憤怒を惹起し、一般的のストライキは千九百三十一年一月二日に宣言され、其反響の速かなる二十四時間以內に國中の工業組織は殆んど全く癱瘓した。之と同時に暴動は東京市中の多くの個所に起り、警官

の力が薄弱なる地方では之に抗抗した。茲に於てか多數の軍隊は鐵の手を以て總ての擾騷を壓服すべき命令を受けて主要なる都市に派遣された。一月四日の夜間首相及び內相の官邸は監視の任に當れる軍隊を突破した大なる群集の爲めに襲擊され、小銃火により追ひまくらるゝ以前に既に大なる損害を與へた。而して軍隊の一齊射擊の爲に斃れた人民の死體は擔架に載せられて『革命歌』の悲哀なる曲中に市中を通過したのである。翌朝議會は開會の筈であつたが、少くも一萬の群集は早朝議會の附近に押かけた。各國務大臣や議員等は警官と軍隊の嚴重なる警戒裡に安全に議會に入ることを得たが、議會外に於ける群集の騷擾は其日の議事進行を甚だしく困難ならしめた。政府は兩院議員の質問に答へて、事態は將に平穩に復せんとしつゝあり、然も若しストライキにして繼續するならば、軍隊は之を取締らんが爲に派遣せらるべく、加ふるに憲法を覆さんとする惡魔に對しては例へ幾萬の軍隊を用ふるも之を制壓すべしと宣言した。此日首相

は貴族院の控室を出でんとする時、使丁の服を着せる一人の男の爲に爆彈を投ぜられた。恐るべき爆發は起り首相は重傷を免れたが、二名の議員は即死し、控室に在つた人々には多くの負傷者を出した。訊問の結果右の暗殺者は若き學生で、閣員の一人より使丁の服を得て議會に這入つたことが判明した、

四、日本政府開戰に決す

此日夕刻川村首相の別邸に內閣會議が開かれ、參謀總長岡大將も亦之に參加した。此重大なる會議の內容に就ては矛盾せる種々な風評が傳はつたが、其後の結果より見れば、首相は其言明せる所謂『人民の眼を覺まさん』が爲の猛烈なる計畫を赤裸々に發表し、即時之を斷行せんことを參列者に求めたものと思はるゝ。日本の史家池田博士は千九百三十四年中東京で發行した其近著『政治上より觀たる日米戰爭の來歷』中に、此內閣の緊急會

議の主旨が何であつたかを精細に述べて居る。次に光明を投じた其一節を引用しよう。

首相川村公は外相福原男、海相大島陸相大藤の二大將及其他の閣僚の揃つたのを見て、此會議は軍事上最も重要な問題を含むから、參謀總長の來着を待て之を開かんことを告げた。間もなく岡參謀總長も來着した。茲に於て首相は會議を開く旨を宣言し、次の陳述を爲した。

今や國家は危急存亡の時機に際會して居る。諸君は革命が吾人が之に抵抗し得るよりも一層の速さを以て國內に傳播しつゝあること、並に其互黨等は自己の力を確信して日に增し傲慢となりつゝあることを知らるゝや。余は或方面より彼等と商議せんことを勸められたが、余は之を不幸なる方法と思ふ、何となれば斯の如きは彼等をして其威嚇戰術が成功したものと信ぜしめ、之に增長して有ゆる不可能なる要求を提出するからである。之に反して若し此脅威を抑止せんとすれば最も無慈悲なる手段を採るの外なく、斯くては我に慘血の悲劇を演ずることゝならふ。斯る手段には人民は一時は或は威壓されよう、然しながら遂には益々煽動者の言に耳を傾

くることゝなるのである。加之ならず此革命を鎮壓せんが爲に無限に軍隊を使用することを決定するには、之に先ち軍隊の精神が革命者の狡猾なる宣傳に果して超然たり得るや否やをも確めねばならぬ、然も余は斯る保證を得る能はざるを恐るゝものである。陸軍大臣は余に報告するに、名古屋にある歩兵第八十五聯隊の二大隊は一胞に向て發砲するに忍びずとて東京に送らるゝことを拒んだこと、並に反抗者は嚴罰に處せられたが、師團長は命令違反の行爲が他の聯隊にも起つたことを以てして居る。更に亦只今は金澤師團の中にも反抗的運動が起つたとの報告に接した。果して然らば吾人は軍隊の忠義心に重きを置くことは出來ない。

扨て諸君！　余の見る所を以てすれば此内亂に處する唯一の對策は、人心を外に轉向して衰へつゝある我國民の愛國心を刺戟し、彼等の考へつゝある架空的苦痛に代ふるに他の事を以てせしむるにある。即ち今若し外國よりの不法なる攻擊が受ける脅威があるならば、社會の各階級は直に差別を忘れ、政府を援助せんが爲に團結するに違ひない。斯の如きはこれ通常に起つた所であるから、再び起るべきは確實である。然るに實際に於ては斯る脅威は既に存在して居る。即ち最近支那に於ける軍國主義の流行病は減退することなくして却て增大し、爲に吾人は同國に於ける我重大なる利益を保護せんが爲に、何時劍を取て起たねばならぬ樣な時機が到來するとも限らない。支那が吾人を攻擊し得る樣に、米國が金や武器、及軍需品を竊に同國に注入しつゝあることは吾人は確かな證據を握つて居る。然も今や更にセイヤース事件は起つて居るのである。これ明かに米國は吾人が多年の勞力と犧牲とを拂つて、我經濟的勢力圏内に收め得た支那の諸地方に於ける吾人の特權を竊に破壞せんとすることを實證する——若し證據が必要であるならば——ものでなくて何であらふ。吾人にして若しも米支兩國が同盟して吾人を攻擊する迄待つならば、吾人は朝鮮をも含む所の亞細亞大陸より放逐さるゝに違ひない。斯の如きは勿論世界的強國としての日本の終りを意味するものである。故に余は遲滯なく堅き決心を以て我權利を傷けんとする外國の干涉を拒絶せんことを提議する。勿論余は好んで戰爭しようと云ふのではない、然しながら萬一戰爭となるとも吾人は平然として之に對抗し得るのである。此點に關しては陸海軍參謀部の意見は全然一致して居る。支那に對する我が軍事上の位置は目下の所頗好であるが支那陸軍の改革が進むに從ひ吾人にとり益〻不利となるは勿論である。次に海軍の狀態に就ては、海相は米國との戰爭に勝利の見込みあることを余に確言して居る。其他金貨の準備は專門家が此戰爭に對して充分であることを公言し、大陸との我交通線が開放せらるゝ限り、必要なる物質の供給に缺乏を來すことはない。而して我工業の組織と發達とは或期

間戰爭に必要なる兵器を製造するに充分である。最後に吾人は敵國としては米支兩國以外に打算するの必要はない、列國との關係は我にして直接に彼等の利益を侵害せざる限り――これ特に注意して進くべき點である――我に敵對するの可能性はない。

余をして更に一歩を進めて我國家を防護せんが爲に戰ふ所の此戰爭の勝利より得らるべき我利益を考慮せしめよ。第一に此戰爭は近時我國に擡頭せる彼の有害なる無政府主義を例へ根絶せざる迄も之を遮止し得るものである。我國民は此戰爭の困難なる試練に鍛冶されて、外國の煽動者等が宣傳した有害なる主義より一轉して以前の忠順に復歸せしむるを得べく、斯くして少くも一世紀間は我制度を侵害した革命の害毒を一拭することが出來よう。第二に支那に於ける吾人の地位は鞏固不拔のものとなり、將來何等の障害なしに其資源の開發を繼續することが出來る。第三に吾人は又過去に於て亞細亞人に對して非常なる損害を與へ、若し之を放任するならば遂には全亞細亞大陸を白人の指揮下に歸せしむる、彼の有形無形の西洋の勢力を擴張せんとすることに對して超ゆ可らざる境界を設置することも出來る。第四に吾人は亦之に依りて太平洋上に新領土を獲得することも出來る、然も此領土たるや氣候の温和、地味の豐饒及其資源に富むの故を以て我過剩なる人口の植民地たるに最も適するものである。以上余は當面せる剰

下の問題を何等の躊躇なく諸君の前に陳述し、諸君が義務として二者の中何れを撰ぶかを問はんとする者である。併しながら之を採決するに先づ陸海軍兩大臣の報告を聽くを適當と信ずる。

茲に於て大島海相、大藤陸相、並に岡參謀總長は順次に其意見を述べたが、此等は一般に獨に首相が陸海軍の方面より其形勢を述べた戰爭の勝利疑ひなきことを裏書するものに外ならなかつた。斯くて數時間の熱議の後內相佐々木氏を除く閣員は、强硬なる外交政策は國民を結束し、今將に進行しつゝある重大なる國內の騷擾に止めを刺す最良の方法なることに意見が一致した。獨り內相佐々木氏は之に反對し、自己の意見にして他の閣僚と調和すること不可能ならば直に辭職すべきことを言明した。茲に於て會議は終りとなり、川村首相は次の意味深長なる言葉を以て決別を告げた、曰く『諸君！　此決議を有效ならしむる必要なる手段は間もなく取られるであらふ』と。午後六時緊急戰時計畫書中の第一第二條並に第四條第一項を實施すべき秘密訓令は發せられた。

茲に此記事に關聯して注意すべきは、池田博士は自由主義の人であるから、斯る見地より自國の行動に對しても多少嫌惡の筆を揮ふたのは事實であるが、歴史家としての博士の誠實は何人も疑ふ者は無つた。茲を以て千九百三十一年一月五日の此の日本の運命を左右する內閣會議の如上の記事は大體に於て正確なるものと認めることが出來る。

第二章　日米國交斷絶

戰爭直前に於ける外交上の交涉——有線無線電信の杜絶——劣勢なる米國亞細亞艦隊の危機——米國海軍作戰部次長アッブルトン大佐辭職す——日本巴奈馬運河に其汽船を爆沈す——商船に對する潛水艦戰の論爭——亞細亞艦隊全滅の悲報

一、戰前の外交交涉

今や事件は其運命づけられた目的に向て迅速に進行した。一月六、七の兩日暴動は引續ひて東京や其他の所に起り、軍隊は幾度か其武器を用ふるを餘儀なくされたので、死傷者の數はじり〳〵と增加した。日本が今正に革命の境に踏込まんとするを見るや、日本の敵も味方も鳴りを鎭めて其末路の到るを待構へた。然るに突如！　事態は全く急變した。一月十日の議會に於て外相福原男は莊嚴なる句調を以て、危險なる狀態が隣邦支那に

起り、然も其事件の重心點は豫期せざる第三國の干渉の爲に益々增大したと告げ、次でセイヤース利權問題に關する交渉の顚末を述べ、支那政府は最近に至り平和的意志とは到底兩立するを得ざる態度を取るに至つたことを聽者に注意し、且附言して曰く『吾人は我國の態度を充分明白ならしめんが爲めに米國政府に通牒するに、爭點たる利權問題は獨り日支兩國のみに關するものであるから、セイヤースの利權問題を第三國の外交的商議に附するが如きは日本の欲せざる所なるを以てした』と。此等の言葉が如何に重要なる意義を有するかを知つた議員等は愛國の熱情迸り、連りに拍手喝采して尙も議會の附近に集つて居た群集の喧騷を一時は止めた程であつた。凡そ一時間後新聞の夕刊に大きな見出しを以て外相の報告が現はるゝや、人民はこれ恰も小さな日本が其手を擧げて米國の巨像の鼻の下を毆りつけたものであることを知り、忽ちにして首相の豫言は現はれ、鄕に其改革を叫んだ人民は國內に於ける總ての苦痛を忘るゝに至つた。勞働

者の集團は尙も行列を作りて市中を練り歩ひたが、道同は彼等は革命歌の代りに其祖先等が戰爭に臨まんとして歌つた軍歌を歌ひ、萬歲の聲は天に迄鳴り響ひた。此夜勞働團體の主領等は緊急集會を開きて外國との危機が去る迄は一般のストライキを止め、且政府に對する戰鬪を中止せんことを決議した。首領の一二は之に反對し、斯る危機は實際上人民の思想を革命より他に轉向せんが爲に仕組まれたもので、帝國主義者等は日本を戰爭の渦中に投ぜんとしつゝあるから、今は勞働者の運動は以前よりも一層必要となつたと云つたが、此等の言は遂に採用されなかつた。斯くてストライキは熄み、苟も外國の侵略に對して國家を防護せんが爲の合理的方法ならば、其如何なるものなるを問はず、勞働同盟は之を以て政府を援助すべしとの誓約を決議したのである。茲に至て川村首相の計畫は完全に成功し、革命は一時外に向て轉向したが、然も愛國の火焰は之に油を差さずんば反て反動を生じて再び混亂を惹起するの恐れがある。茲に於てか政府は新

聞紙を利用し、日本の移民問題に關する米國の横暴なる人種的偏見を持出して火勢を熾んにしたので、數日ならずして排米熱は極度に迄然へ上つた。

恰も此時日本の排米氣分に更に刺戟を與ふるものが起つた、これ卽ち米國政府よりの强硬なる覺書が日本に到着したのである。此覺書は華盛頓政府がセイヤース利權問題の正當なる事を支持せるのみならず、山西省方面に於ける日本の主張せる特惠的待遇をも否認するもので、議會に於ける外相福原男の演說に對しては『深甚なる驚愕を禁ずる能はず』と告げたのである。日本政府は外交上の先例を無視して此覺書の內容を直に新聞紙上に公表したので、さらでだに疑心暗鬼の日本人は之を以て愈々疑ふ可からざる米國の侵略的企圖の證據なりとした。次で米國政府は二月四日付の覺書を以てセイヤース問題に關する爭議を、千九百二十二年二月華府に於て調印された九國條約に基き、之を仲裁裁判に付せんことを提議したが、日本は該問題は國家の主權に關するものなれば、之を國際的仲裁裁判に付

すべき問題に非ずとして之を拒絕した。

米國政府は日本の此の峻拒にも拘らず友誼的解決を爲さんが爲めに尙も努力を繼けつゝあつたが、恰も此時一の事件は突發して日本に於ける戰爭熱に更に新たなる衝動を與へた。二月十五日紐育の一新聞紙は恰も官邊より出でたるが如き句調を以て、太西洋方面に在る米國の全艦隊は巴奈馬運河を通過して布哇にある太平洋艦隊に合同し、然る後全艦隊は比律賓に向ひ發航の命令を受けたとの報道を載せた。此報道は公報により直に米國海軍省の取消す所となつたが、實際には數隻の軍艦は太平洋への廻航を命ぜられたるも、ソハ唯だ普通の航海に過ぎずして、比律賓への艦隊の出發の如きは全然虛構であつた。不幸にも日本へ發送されたものは最初の電報紐育新聞紙上のもの)で、後の取消電報は何故か四五日間發信を抑止されたので日本に於ては人心大に興奮した。此取消電報の東京に到着以前—又は日本政府か其受信を公然と承認する前に—東京政府は華府に劇烈

なる覺書を送り、米國艦隊這回の行動目的は『日本に對する脅威以外に之を解釋するを得ず』と抗議した。該覺書は更に進んで、數隻の米國運送船が大砲及機械水雷を積んで比島に向ひ航海中なるを知れりと云ひ、此等の船舶にして直に召還さるるに非んば『帝國政府は米國政府の斯る企圖を以て友誼的性質のものに非ずと斷定せざるを得ず』と宣言した。今や日本は例へ戰爭を挑發せざる迄も米國を外交的屈辱の地位に陷れて、極東に於ける其威嚴を消滅せしむるのみならず、同時に亦米國をして、日本其儘の語を藉りて云へば、支那に於ける日本の優越なる勢力及其資源の獨占的開發權を承認せしめんとするに傾けることは明白となつた。此爭點の重心點が何であるかは素より米國政府の熟知する所であつたが、同國官憲は國家の名譽を失墜することなしに、出來るだけ不幸なる戰爭手段に訴へずに之を解決せんとして、更に日本政府に向ひ長文にして懇切なる覺書を送り、米國の提案たる仲裁裁判問題を再考せんことを以てし、且米國は苟くも日

本の利益に反すると認めらるゝものは、其軍事上たると否とを問はず、或種の行爲を取ることを愼重に自制すべしと保證した。該覺書は更に仲裁裁判所の決定を見る迄はセイヤース事件は素より、爭議の問題となれる支那の領土內に於ける他の總ての米人の企業も其作業を一時中止すべき旨を告げ、日米兩國間の傳統的友好關係を回想して其語を結んだ、曰く『米國政府は此友好關係が何等傷けらるゝことなく繼續せんことを最も熱心に希望し、之が爲には全力を盡すべし』と。然も今や將に動きつゝある力の前には斯る外交術も何等の效も奏せなかつた。

日本は既に劍を拔くことに決定して居たので、今や九分通りまで出來上つた時に之を鞘に收めようとしなかつた。されば此米國の覺書に對する回答も無愛想で、平和的精神を述べつゝも軍艦、軍隊又は軍需品等如何なる種類の增援たるを問はず、苟も布哇以西の米國艦隊根據地に派遣せざるべき要求を繰返した。外相福原男は更に附言して曰く、『帝國政府は馬尼剌

に向ひ現に航海しつゝある運送船は直に召還の命を與へられたものと信ず、然らずんば日本政府は國防上便宜と思考する手段を取るの權利を留保せざる可らず』と。華盛頓政府の閣員中には日本と戰ふよりも寧ろ此の最後通牒――結果に於ては最後通牒である――に從はんことを望んだ者もあつたが、輿論は既に事件を引受けつゝあつた。由來米人は平和を好むの人民である、併しながら國家の危急存亡に際しては其愛國的熱情は他の如何なる考慮をも之を廢棄するに躊躇しない。されば今此場合に於ても日本の要求が少くも正義と公平の本領を有し、然く挑戰的態度を示さなかつたならば、米國の輿論は疑もなく政府に反對し、米國政府は國民の怒を買はなくとも極東に於ける如何なる利益も殆んど之を讓つたに違ひない。然るに日本の野蠻は豫期せられたる結果となつて現はれて來た。有ゆる方面の米人は日本政府に對する國務省の最後の覺書を以て餘りに温和に過ぐるものとなし、新聞紙は一二の例外を除ひて政府に勸告するに、米國民

の忍耐は今や其極限に達せるを日本に通知せんことを以てし、更に一歩を進めて亞細亞に於ける米國の利益を防護せんが爲には、遲滯なく有ゆる手段を取らんことを要求し、特に比律賓に戒嚴令を布かんことを強調したのである。米國政府は如何なる犧牲を拂ふも其利益を防禦せんとする自國民の此決心に對しては、勢ひ日本に對して強硬なる態度を取るの外はない。茲を以て日本政府に通告するに馬尼剌に向ひ航行しつゝある運送船を召還せんとする日本の要求には應ずる能はざる旨を以てした。此日（二月二十八日）問題の運送船ビューフオート及ニューポートニュースの二隻は比島への途上太平洋上半途の所にあり、米國驅逐艦の數隻は馬尼剌の正東一千浬の地點に於て之と會し、安全に之を目的港迄護送すべき命を受けて居た。此日本に對する回答と同時に米國亞細亞艦隊司令長官リプレー大將は麾下艦隊を比島の主要なる海軍根據地に集合して爾後の訓命を待たんことを命ぜられ、且政治上の狀態は頗る重大にして、艦隊の安全に關し

特別の手段を取るの必要あることを通知せられた。

二、米國の亞細亞艦隊

リブレー提督に與へられたる如上の訓令は米國海軍省に於ける論爭の的となり、之が爲め作戰部次長アッブルトン大佐の辭職となつたことが其後間もなく世に知れ渡つた。大佐は赫々たる技能を有する人で、之より繼き一年前通常將官を以て補せられた此重要なる位置への大佐の任命は或方面には不平を生じたのであつた。抑も亞細亞艦隊の戰鬪力は實際上微々たるもので驅逐艦と潛水艦を除けば戰鬪力小なる老朽の軍艦より編成されて居た。此艦隊は艦齢二十年以上を有する裝甲巡洋艦ミススーラを旗艦として、老朽且小型のフレデリックの外に、低速にして舊式なる輕巡洋艦ガルベストン、デンバー、クリーブランド、小型の航空母艦カーチス、十隻の驅逐艦、十隻の小型機雷敷設驅逐艦、十二隻の潛水艦、其他種々の非戰鬪用補

助艦より成つた。此艦隊の大部は日本艦隊の攻擊に對しては重大なる抵抗を爲すを得ずして、勢ひ撃滅さるゝの外はないので、アッブルトン大佐は直に之を布哇に引揚げしめんことを乞ひ、驅逐艦と潛水艦は比島の防禦に協力し得るを以て之を西太平洋方面に留めんことを提議した。然るに此提議は作戰部長モーリソン大將の容るゝ所とならなかつた。大將は亞細亞艦隊の勢力を大佐の信ずるが如き然く劣弱なるものに非ずとし、若し之を集中する時は日本艦隊の戰艦隊以外に對しては相當に戰ひ得るものと信じたのである。アッブルトン大佐は不幸を豫示する此上長の命令に對して自己の責任を引受くることを欲せず、爲に作戰部次長の職を辭して艦隊の指揮官に轉任した。然るに此辭職は或期間内許されなかつたが、大佐の判斷の正確なりしことは其後辭職と同時に起つた艦隊の不幸に依て證據立てられた。而して大任の後任としてはハッバート少將が之に任ぜられた。

三月二日リプレー大將よりの電報は米國海軍省に到着した。此電報には海軍省よりの獨の訓令を受領したる旨を述べ、且速に增援艦隊を送らんことを以てし、比島に於ける彈藥並に軍需品の豫備缺如せることを指摘した。不幸にして此電報は同大將よりの最後の通信であつた。其後一日を經て有線電信は杜絕し、米國太平洋岸に於ける高力なる無線電信所よりの電報並にサモアよりの複信を以て幾度か打電せるも何等の答信をも得なかつた。加之ならずグワムとも亦通信の連絡が杜絕した、同地の無線電信所は普通の狀況の下では一萬浬の距離迄送信するを得たのである。西太平洋上に起つた此等無線電信の答信不可能なるより見れば、何者か强力の電波を用ひて米國の通信を妨害しつゝあるを知るべく、然も其何者なるかは勿論明瞭であつた。他なしこれ明かに日本が戰爭に決して既に敵對行爲を開始した結果と見るの外はない。此信念は三月三日の夕刻華府に於て既に一般人士の懷く所であつたが、果然同五日に至り華盛頓駐劄日本大

使坂谷伯は米國政府に向ひ旅券を要求した。然も此日發せられた日本の宣戰布告は、之より獨き敵對行爲は既に閉始されて居たので、餘計なる一片の儀式に過ぎなかつた。

三、巴奈馬運河の閉塞

之より獨き二月末事態の重大なるを見るや、米國海軍省は當時大西洋及カリベアン海方面に在つた軍艦に太平洋艦隊司令長官ロバート・ヂエー・ダーリンガー大將の麾下に合すべき訓令を與へた。此訓令は勿論秘密であつたが、多數の米國艦隊が巴奈馬運河を通過して西に向ひつゝあるより見れば、既に艦隊の大集中が太平洋方面に行はれつゝあることは明白であつた。此時普通の商船も亦同樣に運河の航行を許された、これ米國政府は尙も平和を欲せるが爲に、戰爭に對する準備を爲しつゝありとの誤解を招かざらんが爲である。但し運河の米國官憲は此重大なる時機中殊に特別の

注意を拂ひ、通航商船は米船なると否とを問はず、總て運河に入るに先ち臨檢することゝなつて居たのである。三月三日未明大阪商船會社の大貨物船明石丸はコロン沖に到着し、米國一砲艦の臨檢を受けた。該船は重き機械類や鐵道用材料等を積み、漢堡より神戸に向ふものであつたが、總ての船舶書類も正當にして何等怪むべきものを發見せなかつた。且日本の船舶を抑止すべき命令は未だ受領して居ないので臨檢官は運河を通過せしむるに決した。但し船長には該船が運河を通過し終る迄米國の武裝哨兵を付すべきことを通知したが、船長は何等之に反對せなかつたので、一名の下士は四名の海兵を率ひて巴奈馬まで同船に乘船することゝなつた。此約一萬二千噸のデッドウエイトを有する大貨物船は今や第一の閘門を通過してガツンレーキに入り、該船に先航した米國巡洋艦ヒューロンの後方八浬に航行しつゝあつた。此時該船は突如として十三節の全速力を出し、水路が有名なるキュレブラ・カツトに入る所のバス・オビスボの所では五浬の

所まで米艦に追付ひた。想ふに該船が斯く速力を增したのはヒューロンをば將に起らんとする災厄の道連れに供せんとするにあつたとは何人も信ずる所である、然も米國巡洋艦は幸にも何等の損害も受けなかつた。明石丸が恰もキュレブラカツトの約半途に來た時突如として恐ろしき爆發起り、大なる水柱は烟や砂塵と共に空中に揚つた。此大爆音と共に運河に親炙せる何人にも知れ渡つて居る天地も搖がんばかりの轟音が聞へた。卽ち爆發の劇動によりキュレブラ掘割の兩岸にある數百萬噸の土は刎ね上げられて、未だ嘗て見ざる非常な大面積の地辷りをしたのである。運河掛りの一隊の官憲は現場に駈付けたが其非常なる光景に驚ひた、卽ち砂塵の烟は濛々として尙もカツトの上空を蔽ひ、其兩側は約一千碼の間土地が崩壞し、半時間前迄は廣き水路であつた運河は、今は高さ二十五呎の土壘となつて居た。勿論之は運河の床で附近の山岳の非常なる壓力の爲に押上げられたものである。此爆發を惹起せしめた日本の汽船は影も形も見へ

なかつた。斯樣に大きな汽船が僅か數秒間に全然消失するとは信ずるを得ざる程であるが、事實は正に其通りであつた。其後該船の破片は爆發の現場より數浬離れた所で發見されたが、船體と全乘員とは全く消失した。此損害の程度の如何に恐ろしきものであるかは之を一目するば判る、此のキユレブラ・カツトはこれ迄數回地辷りをしたので之に對する特殊の機械も既に準備してあつた。然るに這回のものは未だ嘗て見ざる程度のもので、山崩れを切開ひて水路を開かんには數ヶ月を要するが、然も米國にとりては運河が最も重要なる使命を果さんとする時機に於て全然杜絶されてしまつたのだ。

此不幸なる結果を齎らした不思議なる爆發の原因に就ては今に至るも尙不明である。日本政府は全然之に關係なしと云ひ、恐らく該船の石油燃料に引火して爆發せるものであらふと稱したが、斯る小供らしき理由は專問家は之を一笑に附した。此等の專問家は頗る多量の高勢爆藥を使用す

るに非んば斯る恐しき爆發は起らないと云ひ、其一人の如きは少くも一千噸のダイナマイトか又は他の爆藥を用ひたものであると云ひ、他は之よりも尙頗る多量であると稱した。今此明石丸の行動を調査するに、該船は種種なる貨物を積んで神戸を出て、千九百三十一年一月十五日漢堡に入港し、此所で總ての積荷を揚げたものとせられて居る。次で該船は漢堡に於て機關車や重き機械類を滿載したが、一も爆藥を積んだ形跡は無い。斯くて同船は二月五日日本に向て出發し、二十六日間に五千浬を航破してコロンに到着して居る、是卽ち普通の經濟速力十節を以てしては餘りに長きに失するものである。該船と殆んど同時に同じ航路を取つた他の數隻の汽船の報告に依れば天候は良好であつたと云ふ、されば明石丸が斯く航海に長時日を費やしたのが疑問で、恐らく該船は航海中他の汽船に出逢ひ、之より右の爆藥を搭載したものであらふ。此見解は一般の承認する所であるが、之とても勿論該船は其倉庫より既載の積荷を卸さずして如何にして一千

噸のダイナマイトを積み得たか、又如何にして此等の爆發を臨檢官の眼を避け得る樣隱匿し得たかは信ずるに足る說明をなすことは出來ない。幾分事實と符合する他の見解は、數日又は數週間以前に運河を通過した日本の一汽船がキュレブラ・カットの水底に爆藥を投入し、明石丸は豫め準備した方法を以て之を爆發せしめたとするのである。併しながら乘員等が決死的に自己と船とを犧牲としたるものであるか、又は或過誤の爲め爆發を起したものであるかは今に至る迄其謎を解くことが出來ない。日本政府は素より、其船主や日本及歐洲に於ける代理店等も戰爭の始めに明かに運河を閉塞せんとして、豫め深き魂膽ある隱謀をなしたと云ふ事實や共謀の說をば等しく否認した。併しながら例へ日本が他の敵對行爲を自制せしとするも米國政府は、兎に角此亂暴な行爲を以て戰爭行爲と認むるは確かである。

之を米國側より觀るに、運河の閉塞は非常に重大なる不幸で、海軍を戰略

的に使用せんとする基礎となるべき總ての計畫を畫餅に歸せしむるものである。此時に當り艦隊の大部は既に太平洋方面に廻航し終つたが、重要なる數隻の軍艦は尙も大西洋方面に在つた。此等は對岸太平洋方面の戰時根據地に到らんには一萬三千浬の長程を航過せねばならぬのである。併しながら運河の閉塞は之よりも尙重大なる結果を來す所の他の不幸を伴ふものである、他なし之に依て少くも數ケ月間は、戰爭の遂行を直接に左右する、大西洋岸の總ての軍港要港を使用するを得ないと云ふ一事である。今や太平洋方面の全艦隊は同方面の軍港や要港に其の維持を依賴せねばならぬことゝなつたが、此等の地方に於ける施設は斯る大艦隊に對しては恐ろしく不完全であつた。されば運河が復舊する迄は艦隊に必要なる莫大なる燃料、糧食及其他の軍需品はホルン岬を廻りて太平洋方面に輸送するの外はない、何となれば鐵道輸送は海上輸送に遙かに及ばないからである。然も海上輸送に依るも尙普通の貨物船を用ひて其航海に約二ケ月を

要する以上一刻も速に運河を復舊するは至緊至要である。然るに從來の例に依れば、大船を通過せしむるに足る樣充分なる深さと幅とに運河を開鑿せんには少くも四ケ月の日子を要するものである。然るに這回のものは運河に要する超人的努力を嘲笑するかに見へた地辷りの爲めに實際には六ケ月半以上の日子を要するものであつた。

四、日光丸の拿捕

日本が其敵に對して與へた此最初の打擊と時を同ふして、次に述ぶる所の重大なる損害と災厄とは斯る打擊の結果として現はれて來た。此出來事は些末のものであるが今や開かれんとする海上戰爭の舞臺面には遠大なる結果を及ぼすものである。キユレブラカット爆破の報に接するや、運河に在る總ての商船、並にバルボアやコロンに在つて通航の許可を待受けつゝあつた船舶は砲臺の下に碇泊を命ぜられ、其の國旗の如何を問はず、何

れの船も臨檢を受くる樣命ぜられた。これ既に破壞された運河に更に損害を加ふるなきやとの疑念があつたからである。又運河地帶よりの總ての通信は嚴に檢閲され、運河の損害に關する通信は一切之を禁ぜられた。米國が斯る處置を取りたるものは、軍事上の理由より運河に關する報道を數日間秘密に保たんとするのみならず、總ての入港諸船舶を抑止臨檢して爆藥を隱匿せる他の船舶をも發見せんとするに在る。勿論日本は其船舶に米國との開戰を通知すべき或種の手段を取りたりと思はるゝを以て、斯る場合には此等の船舶は運河地帶への接近を避くるものと信ぜらるゝも、さればとて或過誤により米國の置ひた罠に懸るものなしとも限らない。尙又運河地帶の防禦に任ぜる米國の驅逐艦、潛水艦及航空機には、コロンと巴奈馬より各々二百浬の距離に亘り、大西及太平洋の海面を哨戒し、運河の入口附近を嚴に監視し、其發見した船舶にして逃走を企つる者は、其如何なる船なるを問はず、臨檢の爲め之を港に引致せんことを命ぜられた。

三月五日午前八時コロンの北方百五十浬の地點に在つた米國潜水艦S四號は國旗を掲げざる一隻の大商船を發見した。此商船は運河を背にして正東に航行しつゝあつたが、米國の潜水艦を見るや否や直に針路を變じ且速力を增したので、S四號の艦長ブラッドロー大尉の怪む所となつた。茲を以て大尉は速力を十五節に增し『停まれ』の信號を掲げたが之に應ぜないので、潜水艦の四吋砲より一發の砲彈を發射した。汽船は次で放たれた第二の砲彈にも應ぜざるのみか、其烟突よりは濛々たる煤煙を揚げ出したので大尉は逃走を企つものと考へた。時に天候險惡にして視界僅に二浬に過ぎず、且怪しき汽船は高速力を以て逃走するので、ブラッドロー大尉は追及不可能なれば最後の手段を取るの外なしと信じ、且斯る處置は己の受けたる命令の主旨に違反するものでないと考へた。茲に於て更に一彈を船首の少し前に向けて發射せしめたが此砲彈は該船の前方百碼以内の海面に落下せしも、汽船は依然として停止せなかつた。時に濛氣深くして

汽船の外形は朧朦となつた、潜水艦は最大速力を以て追及するも之に及ばないので今は該船を停止せしめんには眞に之を射擊するの外はない。然も尙無益の損害なからしめん爲め最初の二彈は信管（註彈丸を爆發せしむる爲の雷管）を着けずに發射した。此第一彈は極めて近彈で汽船の前甲板に水烟を蒙らせ、第二彈は稍遠かつたが一隻の端艇を破損してデッキハウスの一部を損傷せしめた。之を見たる汽船は遂に對はずと思ひ、直に停止し、日本の國旗を掲げた。茲に於て潜水艦は極めて近距離に接近し之を誰何したが船長は傳聲管（カホン）を以て日本郵船會社汽船日光丸なりと答へ、乘客と積荷を以て紐育よりバルバライゾを經て横濱に赴くものなりと答へた。船長は更に附言して、通常の航路としては巴奈馬運河を通過する筈なりしも、數時間前日米間の形勢切迫せる無線電信を接受したので、先づ伯拉爾の一港に入り、船主よりの爾後の訓令を受けんとするにあつたと云つた。彼は又潜水艦が自船を砲擊したるを猛烈に非難し、商船に對する潜水艦の

攻擊は國院法上禁ぜられて居るから。逃走するは自己の權利なりと主張した。茲に於てブラッドロウ大尉は談話を打切り、該船にコロンに向ふ樣命じたが、船長は抗議の後之に從つたのでS四號は其砲を該船に向けつゝ汽船の後方に隨航し、難なくコロンに到着した。此地に於て該船は臨檢の上隅なく搜索されたが何等怪しむべきものを發見せなかつた。但し該船は開戰後捕獲されたので、捕獲物と見做され、其後米國海軍の補助艦として使用さるゝことゝなつた。海軍省は運河地帶の指揮官を經てブラッドロウ大尉の詳細なる報告に接した後公式に大尉の行爲を嘉納した。

然るに此事件は危險なる先例を作つたものとして非難され、日本は之に乘ずべく其機を逸せなかつた。即ち間もなく日本政府は世界に向て、米國の一潛水艦は千九百二十二年華盛頓で調印された五國條約を直接に侵害して日本の商船を攻擊し、然も米國官憲は此潛水艦長の不法行爲を是認せるを以て、日本政府は該條約は一片の白紙と化せるものと信ぜざるを得な

い。茲を以て潛水艦は如何なる方法たるを問はず、苟も適當と信ずる方法を以て之を使用するの權利を留保すと宣言した。斯くて此事件はS四號の行爲は果して商船に對する潛水艦の使用法に關する條約を侵害するものなりや否やとの議論を國際法學者間に起さしむる本となつた。該條約の條文は左の如きものである。

第一條

(一)商船は其拿捕せらるゝに先ち、其性質決定の爲、臨檢及搜索に服すべきことを命ぜらるゝことを要す。

商船は警告の後臨檢及搜索に服することを拒み、又は拿捕の後指示せられたる如く進航することを拒みたる場合に非れば之を攻擊することを得ず。(下略)。

(二)交戰國の潛水艦は如何なる事情の下に於ても前記一般的規則より免除せらるゝことなし潛水艦が右規則に從ひ商船を捕獲する能はざる時は、現存國際法は該艦が攻擊及拿捕を止め、右商船をして障礙なく航せしむべきことを要求す。

第四條

署名國は中立人及非戦鬪員の生命保護の爲め、文明諸國の普く採用したる規則が千九百十四年乃至千九百十八年の最近戦爭に於て侵犯せられたるが如く、之を侵犯するに非んば潜水艦を通商破壞者として使用するの實際上不可能なることを承認す。又通商破壞者として潜水艦を使用することの禁止を國際法の一部として普く採用せしむるの目的を以て、署名國は右禁止が其相互間に於て今後拘束力を有することを玆に受諾し、且他の一切の諸國に對し、本取極に加入せんことを勸誘す。

之に依て見る時は上記の條文には予盾の點あるを發見することが出來る、卽ち一方には潜水艦は商船を停止し、其臨檢及捜索を爲し得、又該商船にして前記の臨檢及捜索を拒む時は之を攻擊し得ることを暗示しながら、他方に於ては、潜水艦は商船内に在る非戦鬪員の生命を危險ならしめずに、該商船を拿捕すること不可能なる時は、攻擊を禁止することを明示して居る。加之ならず次の條文には、米國を含む所の署名國は、如何なる事情の下に於

ても商船に對して潜水艦を使用せざることを承認して居るのである。前記のS四號及日光丸の場合は米國の爲には例外のものであると云ひ得べく、實際に於ても亦然く論ぜられた、蓋し其僅か數時間前には日本國旗を揭揚した一商船は巴奈馬運河に爆沈して重大なる損害を與へて居る。素より日本政府は其共犯者たることを拒んだが、日本の國籍を有し、日本人の操縱する商船が不都合なる戦爭行爲を犯したるの事實が明かに殘つて居る以上、巴奈馬附近に在る總ての日本船舶が疑はれ、反證の擧らざる限り實際の敵として認めらるゝは自然であるからだ。斯る理由により米國側は停止の信號を受けたるも捜索に應ぜざりし日光丸は頗る怪むべきものとして、之に對して取れる潜水艦の行爲を正當なりと主張した。該商船が水上哨艦の代りに潜水艦の爲に阻止されたのは遇然の場合で、何等問題の要點を左右するものでない。玆を以て米國政府は潜水艦の使用に關する前記の條約は依然として有效で、何分の訓令ある迄は米國潜水艦は此條文を遵

守することに決定した。斯くて此論爭は戰爭中繼續したが、日本はS四號が發砲せることは、通商破壞艦として潛水艦を使用せるものであるから、停止の信號に應ずるの必要なしと主張し、雨來敵の商船を攻擊せんが爲に其水中艦艇を使用するに躊躇せなかつた。

五、亞細亞艦隊全滅の報到る

併し乍ら暫くの間は一般の注意は之よりも尙一層直接の關係を有する他の事件に集中された、これ卽ち衆寡敵せざる優勢なる敵に對して、米國の海外領土を保護せんことを命ぜられた勇敢なる米國將卒の運命如何である。三月三日より七日迄は此等の遠隔せる方面に起つた悲劇を陰蔽せんが爲に、恰も西太平洋の廣大なる海面には見透し得可らざる大なる幕が張られてあるかの如く、世界の同方面よりは何等の通信も華府に到着せなかつた。然るに三月八日に至り香港より倫敦への電報が紐育に傳はり玆に

始めて沈默は破られた。之によれば支那の諸港に於ては、日米兩艦隊の大海戰が比律賓群島沖に起り、米艦隊は全滅したとの風說あるを傳へたのである。其後數時間にして他の電報は同一の出所より來たが、這回は實際の報知であつた、卽ちバダビヤより香港へ向つた和蘭の一汽船は、馬尼剌の西方二百浬の海上に於て米國驅逐艦クロスビーの生存者七名を收容した、此等の生存者は半ば沈みつゝある船體に取付ひて居たもので、疲勞の極言語を發するを得ざるも、日本全艦隊との戰鬪の爲め遂に全滅したと云ふことのみを語り得たとの無線電信を打たのである。此海戰の其後の詳細は之を後報に讓るを便宜とするも、此後報の到着以前に、米艦隊全滅の恐るべき報道は、日本海軍省より發表された簡單なるも意味深長なる次の公報で確實となつた。此公報の全文は左の如きものである。

三月六日午後我南方枝隊は平賀海軍中將の指揮下に馬尼剌灣外に於て米國全艦隊と遭遇した。我隊は熟練なる運動により有利の狀況の下に敵と會戰し、戰鬪三時間に及んだ。敵は勇敢に抵

抗したるも全滅され、五隻の巡洋艦、一隻の大型特務艦、九隻の驅逐艦並に數隻の潛水艦を擊沈した。其他二隻の給兵船は擊沈され、一隻は捕獲された。捕虜亦若干あり、我損害は輕微である。其後南方海上に於ける我作戰は有利に繼續されつつある。

由來日本の公報は簡單なるも常に要領を得て居る。今此公報に依れば、比島の游動防禦として利用し得る極東に於ける米國唯一の海軍力は全滅したのが明白だ。斯くて比島は海軍を以てする有ゆる防禦の方法を失つて今は日本の全力を以てする攻擊に暴露することゝなつた。勿論陸上砲臺や敷設水雷は幾分の抵抗を爲し得んも、敵の必要と認むる兵力を以てする決然たる攻擊に對抗し得ざるは華盛頓に於ける何人も知る所である。斯る悲劇は事前に豫想されたることも屢々であつたが、今や其の實現するに及んで之が爲に受けたる感情は實に悲痛なるものであつた。此極東よりの悲報は米國の全土に悲みの波を打たせ、爲に當分は之から占領されんとする比島の危險に就ては何人も注意を引かなかつた。米國民は恐ろし

く優勢なる敵に對して最後迄戰ひ、其古き軍艦旗を水に洗はれた壞はれた船體上に打振りつゝ、海底深く沈んだ幾千の海軍將卒の上を擧つて思ひ浮べつゝあつた。然も此慘事の最初の衝動に次で國を擧げて最後迄戰はんとする堅き決心は現はれて來た。此戰爭が如何に長引くとも、如何に多くの血と財とを犧牲に供するとも、敵の劍を其手より打落し、降を我軍門に乞ふ迄は全國民の協同の力を以て飽迄戰はんと決心した。國政の指導者には兎も角として、其他の米國民にとつては青天の霹靂とも云ふべき此馬尼刺の悲劇の詳報を知らんとして待構へた米人の精神は實に斯の如きものであつた。

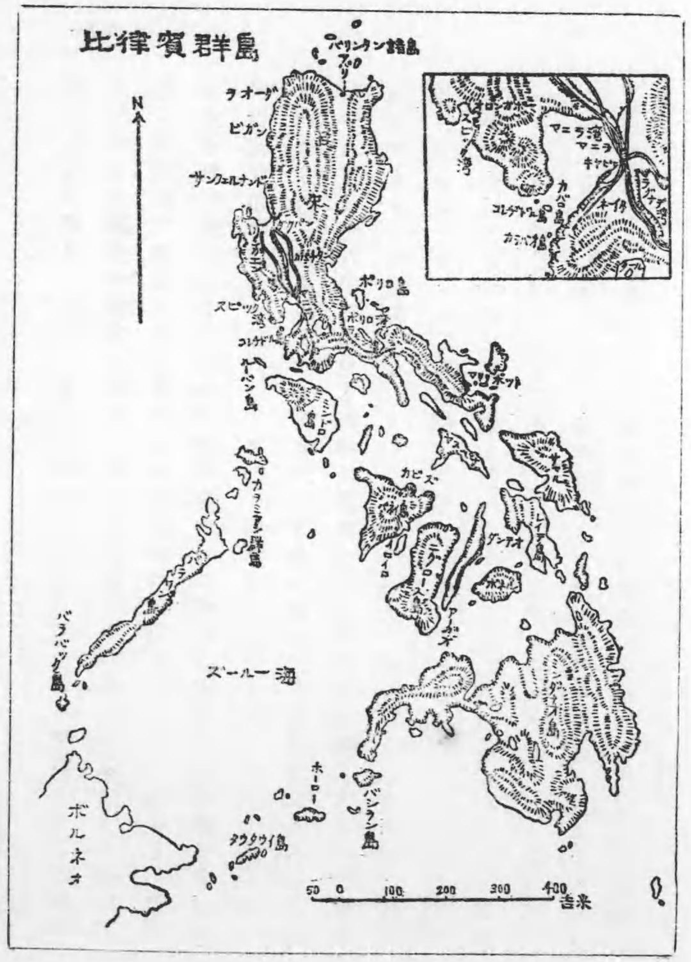
第三章　ルーバン島沖の海戰

米國亞細亞艦隊優報なる日本艦隊に攻撃さる――米艦隊の全滅――日本比島を占領せんとす

――之に對する米國の準備

一、リブレー提督の邀撃準備

死後に發表された米國亞細亞艦隊司令長官リブレー大將の私信に依れば、同大將は若し其艦隊が日本艦隊の攻撃を俟つ樣な事になれば、其結果は絶望的であることを充分に認知して居たことは明白である。千九百三十一年三月三日付の私信に云ふ、『余は刻々に期待される日本の比島占領軍を撃退せんとする陸上防禦と協力せんが爲に馬尼剌に我艦隊を集中することを命ぜられた。昨日以來本國との通信は絶へ、總ての無線電信は支離滅絶して讀むことが出來ない、有線電信も亦昨夜を以て不通となつた。茲



を以て宣戰が布告されたか否かを知るを得ないが、併しながら日本の仕業と思はるゝ此通信の防害を別問題として、茲には戰爭が將に始まらんとしつゝあるとの風評が連りである。勿論舊式艦より成る僅かに一握り程の我艦隊を以て日本の努級艦隊と戰つては多きを望むを得ないが、吾人は無益の死を爲さゞらんことを期して居る。余の受けたる訓今は馬尼剌灣を離る可らずとの意味でないものと余は解釋して居る、何となれば斯の如きは千八百九十八年に於ける西班牙艦隊の自殺的末路を繰返すものに過ぎないからだ。茲を以て余は明日正午石炭を積み終らば全艦隊を率ひて灣外に出で、沿岸附近を巡航して事態の發展を俟たんと決心した。余の麾下に在る飛行機は速に敵軍の近接を報ずべく、敵若し陸軍運送船隊を伴はゞ、吾人が沈没する前に出來るだけ多數の敵運送船を沈めるであらう。併しながら余は敵は我艦隊を處分し終る迄は運送船隊を伴はないかと恐れて居る。若し吾人に只だ二隻の快速にして防禦充分なる軍艦があるならば

敵と戰ふを得んも實際には吾人は甚た窮屈な狀況にある。併しながら余は兎も角も最後まで戰ふの決心である』と。

抑も近代の海戰に於ては、昔しの勇敢なる指揮官が劣勢の軍を以て非常に優勢なる敵に勝つことを得た所謂『戰爭のチャンス』と云ふものを容るゝの餘地は少くなつた。最良な軍艦と最大な砲の多數を有する艦隊は、其將卒にして平均の能力を有する限り戰ひに勝つことは確かである。高度の勇氣、死を恐れざる決心、乃至は優秀なる運用術等は非常に優勢なる有形的機力に對しては物の數に入ることは僅少である。されば米國海軍作戰部長モーリソン大將が亞細亞艦隊に對して比島に殘留せんことを命じたのは、始めより其全滅を指令したるものに外らないのは素より明白である。今日に於て明かとなれるが如く、當時に於ては、日本は恰も日露戰爭の直前に仁川港に於て爲せるが如く、比律賓に對しても海陸の協同作戰を爲すものと想像されるから、艦隊と共に多數の陸軍運送船を伴ふべく、果して然ら

ば米國の亞細亞艦隊は劣勢なりと雖敵に充分の損害を與へて、我損害を償ふを得るとの意見が華府に於て懷かれて在つた。併しながら斯る協同作戰說は日本人を以て海軍戰略の智識に乏しきものと假定したものである。之を以前の諸戰爭に徵するに、日本人は此等戰略の原則を充分に知悉せることを示して居るから、這回のみ之を無視するものとは思はれない。日本が若しも米國艦隊を處分し終る前に、比島に陸軍を上陸せしめんと企圖するものとすれば、ソハ米本國よりの增援艦隊の來着を恐れて、其來航前に該島を占領せんとする場合のみであらう。併しながら實際に於ては日本は斯く其占領を急ぐ必要は無い、何となれば低速なる給油船や、他の必要なる補助艦船を隨伴する、彩大なる米國の全艦隊が、途上最大の集合速力を用ひ、何等の障害も受けずに太平洋を西進するとしても、少くも三週間の日子を要し、加ふるに米艦隊西進すると見なば日本艦隊は之に對する準備を整へ、比島を占領し終る迄有ゆる手段を盡して其西進を妨げ得るを確信し得る

からである。

されば日本の平賀中將が南方枝隊を提げて米國亞細亞艦隊と戰はんが爲めに南航せし時に於ては將軍は陸軍運送船隊を伴はなかつた。平賀枝隊は巡洋戰艦金剛を旗艦として同型艦比叡、霧島の三隻の外に六隻の輕巡洋艦二十四隻の驅逐艦及航空母艦鳳翔より成り、其最低速艦の速力は二十五節であつた。之に對して米艦隊は甚だ劣勢で、リプレー大將の有する二隻の裝甲巡洋艦は紙上二十二節の速力を有するも、他の軍艦を伴ふ時は艦隊速力は最低速艦の速力に調節さるゝを免れないので、三隻の舊式巡洋艦デンバー級の速力以上を出す事を得ない。加之ならず砲力に於ては日本は特に壓倒的に優勢であつた。即ち口徑大なる砲のみを比較するも日本は二萬四千碼以上の射程を有する十四吋砲二十四門を有するに對して、米國側は僅に最大射程一萬五千碼である四門の十吋砲と四門の八吋砲を有するに過ぎない。デンバー級の三隻の舊式巡洋艦は戰線に立つを得ないの

で、實際戰鬪に使用し得るものは以上の裝甲巡洋艦二隻の外に驅逐艦十隻、機雷敷設驅逐艦三隻並に十二隻の潛水艦に過ぎない。此他尙一隻の航空母艦(二十二節)カーチスあり、飛行機十四機を搭載し、內六機は魚雷發射機を備へて居る。

リプレー大將にして若し其艦隊の行動を馬尼剌灣內のみに制限するの策を取らんか、一時は恐らく安全であるかも知れない、何となれば日本人は馬尼剌灣口のコレギドル島砲臺に數門の十二吋砲あるを知つて其艦隊を灣內に盲進せしめないからである。然るに若しリプレー艦隊にして馬尼剌灣內に殘らば、敵は潛水艦を以て灣口に機雷を敷設するのみならず、附近に優勢なる封鎖艦隊を配備するを以て、出擊の機會を得ることは甚だ小なりと考へねばならぬ。米國艦隊にして一度灣內に閉塞さるれば、日本の陸軍運送船隊を遮止するを得ない。日露戰爭に於ける旅順口の實例は之が好個の鑑戒である。米人思へらく、日本の比島占領軍は馬尼剌の砲臺より

適當に離れたる呂宋島沿岸の或地點に上陸して馬尼剌方面に進出し、灣內を砲擊して米艦隊を殲滅するであらうと。呂宋島の守備軍は土民軍を合せて一萬七千を超へざるが故に、日本が派遣すべしと思はるゝ最少限度の攻擊軍八萬に對しては、其占領を一時的に遲延し得る以外に多きを望むを得ない。總て此等の事情を綜合して考ふる時は、馬尼剌灣外に出でゝ敵を要擊せんとしたるリプレー提督の決心は、當時の狀況に於ては採り得べき最良のものであつたことが判明る。提督の艦隊が水上に殘留する間は『現存艦隊』となるべく、斯くして例へ其勢力は小なりとも敵の攻略を邪魔するであらう。

（註）現存敵隊とは艦と正々堂々の決戰を爲すを得ざる劣勢の艦隊が、戰鬪の可能性を利用し如何にも戰はんとするかの如き姿勢を示すことに依て、敵の海上管制を困難ならしむる一種の戰略的手段である。

二、ルーバン島沖の海戰

三月五日の未明米國艦隊の一飛行機なボジードル岬の正西二百浬に大艦隊の烟を發見した。玆に於て此飛行機は尙も接近して之を偵察せんとしたが、日本の機章を付けた三隻の飛行機に追躡發砲され、爲に其優速を利用して僅に之より脫するを得た。これ卽ち空中に放たれた此戰爭の第一彈で、敵情は無線電信を以て直にリプレー提督の許に報告された。又未明以前に西方に航進した他の米機數機も日本艦隊と觸接した。午前五時日本艦隊はリンガエン灣の西方を南々東に航進しつゝあり、三隻の巡洋戰艦は單縱陣を作り、輕巡洋艦と驅逐隊は潛水艦の襲擊に對して主力を掩護した。巡洋艦戰隊の第三番艦たる霧島の後方には航空母艦鳳翔隨伴し、艦隊の前方には追擊機數機が先行した。米軍の飛行機は防禦用に之れを保全するの必要上敵との戰鬪を避けんことを命ぜられたので、敵の行動を遠距

離より偵察するのみに止めた。リプレー提督は此時迄艦隊の配列を了り、午前八時にはルーバン島の北西十浬の地點に在つた。提督麾下の艦隊は巡洋艦クリーブランドを除いては總て準備完整した、同艦は機關故障の爲め十節以上の速力を出すを得ないので修理の爲めカビテに派遣された。之より續き前日の夕刻に分遣された六隻の潜水艦は、艦隊より獨立して今は呂宋の南西岸沖を哨戒しつゝあり、機を見て敵の大艦を襲擊すべき命を受けて居た。又他の六隻の潜水艦はスービック灣とバード島間を巡航しつゝあつた。午前九時十五分米軍の偵察機は日本艦隊が恐らく潜水艦ならんと思はるゝ不明の目標を砲擊しつゝあることを報告したが、此砲聲は始めて敵を見んとて精神を緊張しつゝ待構へた米艦隊にも明かに聞かれた。今や日本の飛行機二機は高速を以て接近し來り、其一機は米國艦隊を横過して爆彈を投下した。此爆彈は旗艦の後方約二百碼の水面上に落ちた。此時迄八千碼の高所に在つて偵察に努めつゝあつたカーチスよりの

飛行機數機は之を見るや、敵機を遮斷し、其一機を射落した。十時二十分ミズソーラの砲火指揮塔よりは日本艦隊の煤煙を認め、後數分にして暗黒色の日本巡洋戰艦隊の姿は水平線上に現はれて來た。其後の戰鬪狀況は米國艦隊の生存者の數名が戰後に發行した著書に依て明かであるが、今左にリプレー提督の副官として旗艦ミズソーラ乘組のエルキンス大尉の所述を左に摘記しよう。

吾人は戰列―余の乘艦とフレデリックの二隻より成る艦隊を戰列と稱することが出來るならば―を指導しつゝある。ガルベストン、デンバー、カーチスの三隻は戰鬪力を有せないので吾人の左舷正横四千碼の所を航行せしめた。蓋し此位置は敵の遠彈（オーバー）に對しても安全なるのみならず、我長官が恐ろしくも云へるが如く、我々の艦が沈沒した時に乘員を救助するにも適當であるからだ。驅逐艦は二隊に分れて左右兩舷の前方に占位し、敵同型艦の來襲に備へた。午前十時三十分彼我の距離二萬四千碼で、長官は此時余と共に旗艦の後艦橋に在つた。此日天氣晴朗にして敵艦の艦影を明かに認むるを得、双眼鏡を以てすれば敵巡洋戰艦隊の巨砲が吾人に指向され

て居るのを見ることが出來る。日本の十四吋砲は最大射程二萬三千碼と聞ひたが、第一發は二萬四千碼の距離で放たれ、然も可なり我艦隊の近くに落ちたので、吾人は敵の射程を下算して居たのだ。卽ち金團と思はるゝ旗艦よりの第一發は四十五秒の後急行列車の如き唸りを立てゝ我艦の右舷六百碼の所に大きな水煙を揚げた。之に次で敵は二分間沈默を守り、我艦隊は此間に距離を開かんが爲に敵同左舷に變針し、我驅逐艦も亦大なる烟幕を張つた、十時四十五分金剛は巨砲四門の齊射を行ひ、他の二巡洋戰艦も之に倣つた。今や空中は千四百封度の巨彈の爲に轟音に滿ちたが、然も此等の敵彈は何れも我艦隊に命中せず、一彈は極めて近く海上に落下して我が後甲板に水烟を蒙らせた。余は司令塔に赴かんとして二番艦フレデリックを見返つたが、偶々此時一團の火烟は同艦の舷側より迸つた。恐らく敵彈は其六吋砲塞の中央に命中して厚き鋼甲の內部で爆發したものであらふ。續いて地の二彈も同艦の前部に炸裂したが、余は其損害を見るの暇はなかつた。此時迄余等の旗艦は何等の損害も蒙らなかつた。恐らく敵は二番艦のフレデリックを旗艦と誤認したものであらふ。彼我の距離は今や短縮して二萬千碼となつたが、我々の空氣銃砲(ポプガン)では未だに敵に達せない。然も我等の長官は敵の劇しき砲火に忍耐し切れずして、『士氣を沈靜ならしめんが爲』に、十吋砲塞に數發を發射せんことを命じた。云ふ迄も

なく此等は何れも近彈であつたが、味方が應射したことはせめてもの慰めであつた。十時五十三分旗艦の艦首を距る數呎の所に第一の敵彈命中し前甲板の大部を破壞した。此時艦頭(トップ)より二番艦フレデリックが危險なりとの通知があつた。同艦は二個の煙突を搖射され、艦の後部は火災に罹り、艦は傾斜せざるも幾分水中に沒して居るので、水線帶甲の上下何れかに重大なる損害を受けたものであらふ。今や敵は其優速を利用して距離を短縮し、意の儘に我艦隊を處分し得るので、彼等が恰も遠距離戰鬪射擊を演習しつゝあるかの如き氣分を以て我に對しつゝあるは明かである。併しながら斯の如きは我長官の欲する所でない。我等の望む所は敵に一擊を加へざる以上不名譽なる戰死を遂てせざるにある。果して然らば此際採り得べき唯一の手段は、例へ全滅するも着彈距離迄敵に接近するにある。玆を以て我艦隊は右舷に變針し二十二節の全速力を以て航進した。此不意の運動が敵を驚かしたか、又は全滅を賭して突進するものと考へたかは知らざるも、兎に角我等は重大なる損害を受けずに一萬五千碼迄近づいた。

今や我砲塞は最大速度を以て發射し、左舷六吋砲塞さへも之に加つた、勿論後者は無益なる發射に過ぎなかつたのだ。斯くて少くも一發は金剛に命中して、第二煙突の下部に大爆發起り、爲に同艦は少しく戰列より離れた樣に見へた。併ながら最早終りは來たのだ。日本の司令長官

は敵に我儘を許したと見るや愈々勝敗を一擧に決せんと決心した。次で起つたものは筆紙に盡
し難く、味方の周圍を取卷く海面は水煙濛々として海水沸騰した。數秒間に六個の爆發は起り、
恰も亞米利加產の大なる赤杉が甲板上に落下したかと思はるゝ凄ろしき音響をも耳にした。次
で耳を劈くばかりの爆音と共に閃光迸り、同時に余は人事不省となつた。余は正氣に復するや
驅逐艦ハルパートの端艇に收容されて居るのを知つた。彼等の語る所によれば旗艦は實際に寸
斷されて十一時三十分に沈沒したのである。余の外に僅に六名の生存者があつたが、長官は艦
と運命を共にしたものゝ如く、恐らく余を人事不省に陷らしめた砲彈の爲に戰死したのであら
ふ。余は何人かの助けを得て司令塔外に移されたに違ひないが、其誰なるやは之を知るを得な
い。

余の乘れる端艇よりは日本人が我艦隊の殘部を始末しつゝあることが見られた。我旗艦の沈
沒後間もなくフレデリックも又全乘員と共に爆沈した。デンバーは艦首より艦尾に亘り火災に
罹りて沈沒しつゝあり、其後にはガルベストンが、日本の輕巡洋艦と戰ひつゝ砲彈を雨注され
つゝあつた。而して余等の之を注視しつゝある間に同艦は漸次に艦首を深く水中に沒しつつ沈
沒した。我等の前方約四浬には五隻の我驅逐艦が三倍の敵と戰ひつつあるも其狀況を詳にする

を得なかつた。其後聞く所に依れば吾人と共に出動した十三隻の驅逐艦、機雷敷設驅逐艦の中
僅に四隻だけがカビテに歸還するを得たのである。此光景を見つめつつある間に我々は飛行機
の爆音を耳にしたが、ソハ四隻より成り、味方のものであることが判つた。實に此等はカーチ
スよりの我魚雷機で、同艦は敵巡洋艦の攻擊を受けんとするや、甲板上にあつた總ての飛行機
を飛ばし、已は間もなく敵の砲火によりて擊沈された。斯くて我飛行機は敵 巡洋戰艦隊に向
て突進したが、其後聞く所に依れば、二機は目標に達する以前に射落され、他の一機は比叡に
向て水雷を發射し、又他の一機は運好くも敵の偵察巡洋艦龍田に水雷を發射して之を爆沈し
た。比叡は損害大なりしも自力を以て本國に歸つたものと思はるる。午後二時三十分日本の驅
逐艦柳は我等の端艇に接近し來り、我等を同艦に收容して巡洋戰艦霧島に移した。同艦では我
等は適當の禮義を以て取扱はれた。

以上は余の目擊したルーパン島沖海戰の狀況である。斯くて我艦隊は全滅し、二千五百以上
の勇敢なる我海軍々人は永へに海底の藻屑となつたが、少くも吾人は我國旗の名譽を辱めざり
しものと信ずる。日本の軍艦中沈沒したるものは龍田と二隻の驅逐艦のみで、其全艦隊を通じ
ての死傷者は六百であると報ぜられた。併しながら彼我勢力の懸隔然く大なりしを思へば、吾

人が少くも敵に或程度の損害を與へ得たるは注目すべきことである。

此戰鬪中には米軍の潛水艦は襲擊の好機を發見せなかつた。然るに同夜十時に至りスービック灣の南々西約三十浬にあつた潛水艦S十八號及同二十三號は數隻の大艦が北航するを發見し、速に潛人して襲擊の機會を待構へた。此等は日本の巡洋戰艦隊で晝日の海戰に傷ひた比叡の爲め低速を以て航行しつゝあつた。此の巡洋戰艦隊には優勢なる驅逐艦の掩護があつたが、米國の二潛水艦は之を冒して襲擊を決行し六個の魚雷を發射した。此魚雷の一は霧島に命中したが餘りに前部なりしを以て損害は至て輕微であつた。S十八號より發射せる二個の魚雷は金剛を狙つたが、其後方を過ぎ、大型驅逐艦濱風に命中し、數分にして沈沒した。此際日本艦隊は多數の水中爆雷を投下せしも潛水艦は無事であつた。

三、比島遠征軍の日本出發

リブレー艦隊の全滅は日本軍に對して比律賓への侵略の途を開ひた。撃沈された米國の最後の軍艦が其艦影を水中に沒せざる以前に、日本の艦隊司令長官よりの無線電信に依て其陸軍輸送船隊は既に行動を起して居た。此等の輸送船隊は十萬の陸兵を載せて數日以前に吳軍港や其他の諸港に待命して居たのである。此全輸送船隊は艦隊と空軍との掩護の下に三月六日の未明を以て右の諸港を出で、十二節の速力を以て南航し、呂宋島着は四日半の後と豫定された。時に米國艦隊は馬尼剌灣外の海戰に生存せる數隻の驅逐艦と潛水艦が同方面に殘留せる以外には最も近きものでも約五千浬の布哇に在つた。日本の比島占領軍は米國の守備軍に比して六倍の兵力を有し、大砲其他の軍需品も同樣の比例で、之を掩護するには日本全艦隊の有する砲力の半ばを以てすることが出來る、況んや必要の場合には兵員、軍需の增援は二十節の運送船を用ひ、三日にして到着するを得べく、臺灣の前進根據地よりすれば三十六時間にして達するを得るので、萬事

は日本側に有利であつた。此占領軍の實際上の準備は既に二月の第三週、卽ち宣戰の布告前に爲されたとは一般の認むる所である。東京の陸軍輸送船班は之に利用し得べき十四節以上の商船百隻以上を共計畫書に記入して居るが、此等は何れも政府の命により之を徵發することが出來る。然しながら之を爲さんには船舶業者に重大なる違算を惹起するのみならず普通の航路より突如として其最快速船を引揚ぐる結果は、外國の疑念を起し、軍事上の大計畫が企てられつゝあることを暴露するの恐れがある。玆を以て比島への遠征軍用には此等の快速船を使用せず、集合速力十二節を得るが如き低速船の必要なる數隻を以て滿足した。斯るは勿論航海日數を大ならしむるの不利あるも、米國の亞細亞艦隊は之を擊滅し得べく、東太平洋方面よりの米國の援軍も其到着に數週日を要するを知れる日本の陸軍當局は、低速の輸送船隊を用ふるより起る少許の遲延は之を甘受した。此占領軍は五個師團より成り、約十萬の兵力であつた。

日本の一個師團は通常步兵二旅團、騎兵及砲兵の各々一聯隊、工兵及輜重兵の各一大隊と、毒瓦斯隊及自動車機關銃隊より成つて居る。右の占領軍には一時間十二哩の速力を以て平地を走り得る三十個の熱田型輕タンク隊が附屬した。又輸送船內にはタンクや大砲等の揚陸用として數個の大型發動艇や函船を積載した。最大口砲としては遠距離砲擊用として數門の八吋榴彈砲と十四珊砲を積み込み、二十個の飛行機を搭載して輸送船隊と共に航行する海軍の航空母艦松島の外に、五隻の輸送船には多數の陸軍飛行機を積込み、其總數百八十機以上に上つた。

大型輸送船の數隻には一船に三千の陸兵を載せ、其他は平均二千を載せた。日本の揚陸演習は年々に行はれるので、這回のものにも士官や兵士は好く慣れて居た。此揚陸に必要なる準備品、例へば端艇、傳馬船、函船及移動用棧橋の如きものは數年前より陸軍兵器廠に於て準備されて居た。

之と同樣に揚陸軍と掩護艦隊との戰術上の協同動作の諸問題も既に充

分に研究されて居た。日清戰爭は素より、其十年後の日露戰爭に於ても、日本人は多數の陸軍を迅速且完全に揚陸せしむることに於て特に優れて居るのを示して居る。勿論這回は上陸に際し妨害を受けんも、米國の守備軍は僅少なるのみならず、何れに上陸するやを知るを得ないので、斯る妨害は恐るべきものと豫期するを得ない。日本の參謀本部が比律賓の防禦を充分に知悉せることは明白の事實で、其土地は何れの方面も日本の將校に依て秘かに測量され且製圖されて居た。現存する各砲臺の位置と砲種が正確に知られて居るのみならず、新たに砲臺を据付くべき位置も東京の陸軍大學校に在る大尺度の地圖に明示されて居た。

日本軍は如何なる時に於ても馬尼剌附近の上陸を企畫せなかつた、蓋しコレギドル島には十二吋砲を有する隱見砲臺數個あり、灣口の兩側陸上にも亦各々十二哩間に亘りて同樣の砲臺がある。此等の砲臺は數哩の半徑も以て海上を掃射し得るので、輸送船隊を放棄して軍艦を砲火に暴露し、以

て、灣口の强行通過を企つるが如きは無謀の業であるからだ。軍艦の砲火を以て砲臺を沈默せしむることも素より問題とならない。各砲臺にはコンクリート製の重厚なる胸壁ありて敵彈を防ひで居るから、直接砲又は砲架に命中するに非んば有效でない、然も砲は僅かに數秒間胸壁上に現出するので之に對する射擊は甚だ困難である。尙又空中よりの攻擊に對しては、砲臺は堅固なる鋼楯を以て防禦ざれて居た。

併しながら灣口の强航通過を企つる敵に對しては此等の砲臺のみが唯一の脅威となるものでない。否他にも亦恐るべき障害物が設置されて居たのである。卽ち灣口には數列に亘りて機械水雷が敷設され、苟も附近の高所に在る砲臺が米人の手中に在る限り之が掃海（敷設水雷を除去すること）を許さない。之より北方約四十浬のスービック灣にも砲臺及機雷敷設面がある。灣內には米國の一要港オロンガポーがあつたが今は廢されて居る、然も此地も亦敵軍の上陸を許さない。然るに他方には固定防禦

なき利用し得べき多くの上陸地點があるから、日本人が前記の砲臺や機雷の敷設しある港灣に其軍艦を暴露して揚陸を企つるが如きは素より有り得べきことでない。

日本人思へらく主なる危險は米軍の飛行機より來らんと。而も其後の事件が證明するが如く彼等の得たる此飛行機數の報告は誤つて居たのである。日本の得た最後の報告では、比島に在る飛行機數は二月の末に於て實際に使用し得るもの五十機以下であると云ふにあつたが、此月の二十五日に一運送船は馬尼剌に到着し、新式にして有力なる飛行機三十機を附加したのだ。而して此等の飛行機は後說するが如く呂宋島の防禦に重要なる働きをなした。米の守備軍は全體に於て一萬七千を超へずと稱せられ、內八千は步、砲及工兵より成る米人の正規軍で、二千は海兵、他は土民兵、比律賓の少年義勇軍及民軍であつた。該島には又各砲四門より成る十個の野戰砲隊、三個の山砲隊、及六吋砲を有する十二個の自動車隊があつた。此他

八吋砲を有する六個の鐵道式砲臺あり、鐵道線路上を相當の速度を以て所要の地點に進み、線路上より直接に射擊することが出來る。此等の砲は敵若し呂宋の北西岸に揚陸を企つる時は、之と並行に敷設されたる鐵道線路上より敵の艦船を砲擊せんとするのである。最後に獨のルーバン島沖海戰に生存せる四隻の驅逐艦と十二隻の潛水艦あり、其將卒は今やクリーブランド艦長ガーナー大佐の指揮下に、巡洋艦隊の不幸なる戰友に代り復讐の念慮に燃へつゝあつた

リブレー艦隊の悲報が六日馬尼剌に達するや何人も日本の比島占領が目前に迫りつゝあるを豫感した。敵の陸軍輸送船隊は既に呂宋に近きつゝありと思はるゝの外なきを以て、斯る打擊は刻々に期待された。然るに上述せるが如く此等輸送船隊の吳出發は米國艦隊全滅の報が日本に達した時迄遲延されたが、此等の事情に就ては米國の守備軍は素より知らなかつたのだ。六日夜は素より翌七日は、晝夜を問はず、米國の飛行機や潛水艦

は不眠の眼を見張りつゝ呂宋への北方航路を監視した。敵の占領軍は何れの方面より出現するや不明なるを以て、潜水艦は之を三隊に分ち、五隻は呂宋の西岸に、五隻はエンガノ岬の東方に哨線を張り、他の二隻S十一號及同十五號は北航して日本の陸軍輸送船隊が南航の途上通過すべしと豫想されるバリンタン海峡を巡航せしめた。

第四章　日本軍の比律賓占領

日本の陸軍輸送船隊比島への途上米國潜水艦飛行機の攻撃を受　――日本軍大なる損害を顧みず比島に上陸す――米國陸軍の必死的防禦――馬尼剌の降伏――數隻の米國輕艦艇逃走す――比島全然攻略さる――グワムとの通信杜絶により米國大に憂慮す。

一、日本軍のリンガエン灣上陸

三月十一日早朝呂宋を出發した米國の飛行機はサンタ・クルーズの北西五十浬に多數の軍艦の南東に航進するを發見した。此等は間もなく日本の巡洋戰艦金剛、榛名及他の多くの小艦なることが判つた。此艦隊は驅逐艦や輕巡洋艦に依て良好に掩護されて居るので、米國の潜水艦數隻は其附近に在りしも遂に襲撃の機會を得なかつた。此等の艦隊は陸軍輸送船隊を掩護する艦隊の前衛であるので、サンタ・クルーズ方面に在る米軍の飛行

機は直に之を攻撃せんことを命ぜられた。然るに此命令の數分後エンガノ岬無線電信所よりの電報は、該岬の東方五十浬にある飛行機より、大艦隊が南方に航行しつゝありとの報道を傳へた。此電報の受領と殆んど同時に第二の電報はボリナオ岬方面にも大艦隊の接近しつゝあるを報じた。此等の電報が何を豫示するやは素より明諒である、實に日本軍は呂宋島の東と西との兩岸に同時に上陸し、守備軍を分離せしめて、各々壓倒的優勢を以て之に對せんとするのである。

米國陸軍司令官オーネイル大將は之に對せんが爲め直に其處置を取つた。卽ちサンタクルーズ沖の敵軍艦を攻撃せよとの觸の命令を取消し、各飛行機は陸軍輸送船隊攻撃の準備をなさんことを命ぜられ、同時にガーナー大佐も亦總ての潛水艦を招致して三縱列を作れる輸送船隊の各々に對せしめた。ボリナオ岬沖の艦船若し輸送船隊ならば――恐らくは然りと思はれる――良好なる上陸地點を有するリンガエン灣に向ふものと判斷

さるゝを以て、之に對しては八吋銃道式砲臺の二門を機關車の力の續く限り最大速力を以て北進せしめ、又飛行機はダグパンに集中を命ぜられた。次にエンガノ岬沖を通過した他の日本艦隊は呂宋島東岸の五六の港灣に向ふものと思はるゝが、日本軍最後の作戰目標は馬尼剌なること確實なるを以て、此地を適當に離れた南方の或地點に向ふものとの判斷は的中した。

三月十一日午前十一時サンタクルーズ附近に來た日本艦隊は着彈距離迄陸岸に近ひて該市に數彈を發射し、電信局や數個の家屋を破壞した。疑もなく此砲撃は米軍を該方面に牽制して他の方面に揚陸すべき日本陸軍の揚陸を容易ならしめんとする欺計であつたのだ。然るに砲撃艦隊は陸上より何等の應戰をも受けないので高速を以て南航し、唯だ其掩護飛行機のみは、イバより來りて日軍の行動を偵察しつゝあつた米國の一機と戰鬪を交へた。此等の日軍飛行機は始めは馬尼剌方面に向ふものと思はれたが、間もなく機首を北方に轉じて其姿を沒した。然るに未だ幾許ならずし

て敵は始めて其本音を現はした。午後三時ボリナオとサン・フアーナンド岬間を哨戒しつゝあつた米國飛行機の一は突如として日軍の數機より猛烈なる攻擊を受けた。此戰鬪中他の敵機數機は來りて陸地に向ひ、河上を横斷してダグバンの飛行機格納庫に連りに爆彈を投下した。次で數隻の日本巡洋艦及驅逐艦現はれ、リンガエンの數千碼內に接近して、陸上の米軍陣地に對し、瓦斯や高勢爆藥を有する榴彈の一齊射擊を行ひ、之に對して米軍は野砲や榴彈砲を以て應射した。

今や夜暗は將に來らんとして、敵は之を利用し上陸を企てんとするものと見へた。午後五時米軍の飛行機は嚮導驅逐隊の濃厚なる烟幕の蔭に隱れて灣內に直進する二列の輸送船隊を發見した。これ即ち米軍飛行機が待ちに待つたる最上の好機である。既に其二十機は空中高く一萬呎の所を飛行しつゝあつたが、此通報と共に他のものも亦地上を離れた。數分にして此等の飛行機は日本軍艦の飛行機射擊砲よりの恐るべき砲擊を冒し

つゝ輸送船隊に向て直進し、敵機の之を妨げんとするものに對しては出來るだけ之を避けた、何となれば米機は之よりも尙他に輸送船隊の襲擊てふ重要なる任務を有するからである。一度日本驅逐隊の烟幕を通過した米機は今や目前にあり〳〵と目指す輸送船隊を發見し得た、此等は二十四隻の大型汽船より成り、陸軍兵を滿載し、二列橫陣を作り、低速を以て灣內に突進しつゝあるのだ。玆に於て米機は空中に大圓を畫いて滑走しつゝ二三千呎の空中より輸送船目懸けて爆彈を投下した。敵は直に機砲と小銃とを以て之に應射し爲に空中は彈丸を以て塡められたが、如何なる犧牲を拂ふも敵に最大の損害を與へんと決心せる米機は之を物ともせずに爆彈を投下した。第一列にあつた最大の輸送船日本郵船會社汽船佐渡丸は、甲板上にカーキー色の軍服を着た陸兵の爲に黃褐色であつたが、投下せられた米機の五百封度爆彈三個の爲に、忽ちにして水に浮んだ屠肉場と化した。數百の陸軍兵は粉碎され、尙多數の者は爆發の爲に四肢を切斷されて甲板

上によろめき、又船の中央部よりは眞黑の烟柱揚りて、船に火災の起れるを示した。、蓋し燃燒物を滿たした甲板下の倉庫に引火したのである、他の十隻の汽船も亦恐るべき損害を受けた、卽ち若狹丸は數分にして沈沒し、二千二百の陸兵中其半ばを失ひ、つばり丸は倉庫內の石油タンクに引火して船體の全部は火災に罹り、爲に人員は總て海中に飛込んだ。此等の損害の外に、輸送船內に積載した軍需品、端舟及他の上陸用機械も大なる損害を受けた。其後米軍の飛行士等は當時四十機の代りに百機の飛行機があつたならば、日本の輸送船隊は實際上之を全滅せしめ、其上陸計畫を粉碎するを得たるならんと主張したが、彼等が與へ得た非常な損害より見ればこれ亦爭はれぬ事である。否四十機を以てさへ六千以上の敵は死傷又は溺死し、其軍需品の多くは破壞され、多數の端舟、傳馬船は紛碎されて、爲に陸軍兵の上陸を數時間遲延せしめたのだ。米軍の飛行士等は實に有らん限りの智慧を絞つた、比較的低空より攻擊して、猛烈なる砲擊を受けたに拘らず、四十

機の中一機にても無事に歸還し得たのは不思議と謂はねばならぬ。此四十機の中二十五機は射落され、七機は損害大にして着陸の際破壞し、只だ八機のみ再び飛行を繼續し得る狀態の下に格納庫に歸來した。

斯の如く米軍の飛行機は拔目なき攻擊を敵に加へたにも拘らず、日本軍の上陸は之を遮止するを得なかつた。卽ち輸送船隊は尙も烟幕の蔭に隱れて陸岸へ突進し、灣外適當の距離にある日本艦隊は齊射を以て味方の輸送船隊を超へて陸上に在る米軍の陣地に砲彈の雨を送つた、然も此等の砲彈は彈着觀測に任ずる日本飛行機の爲に其射擊は甚だ正確であつた。併しながら防者も亦無能で無つた。今や不透明なる烟幕の後方には輸送船が航進しつゝあり、或輸送船は上陸の爲め既に端舟に陸兵を移乘せしめつゝあつた。此等は視認するを得ざるも、其有ることは確實であるので總ての砲は之に向て射擊した。此時に當り二門の八吋銲道式砲臺はダグバンの北東二十哩の銲道線路上まで來着し、陸岸に突進する輸送船隊を側射し

得るの位置にあつた。此等の砲は烟幕を透して朦朧と見ふる多くの輸送船に對しては既に射擊を開始したが、尙も射擊を容易ならしめん爲め再び南方に移動せんとする際、突如サン・フアビヤンに近き線路の一部が地雷の爲に爆破されあるを發見した。此線路は一時間前迄は何事も無つたので間諜の仕業であることは明かである。之が爲め二門の有力なる砲は遂に其威力を發揮することが出來なかつた、何となれば線路破損の爲め現に止つて居る場所は敵軍の上陸場を砲擊するには餘りに距離遠きに過ぎて居るからである。

今や日本軍の上陸準備は酣となつた。夜の來ると共に日本驅逐艦は陸岸に近づき過ぎたるを以て艦首を轉じて外方に向ひ、爲に其作つた烟幕も稍々薄らひだが、然も尙相當に濃厚にして米軍の探照燈光や星彈も如何ともすることが出來なかつた。午後八時日本陸軍の先頭隊は烟幕を突破して海岸に直進し、其端舟はランチや發動艇で曳航され、其艇首よりは臼砲を

以て烟彈を發射した。時に灣内にある日本戰艦は發砲を止めたが、海岸近くにある輕巡洋艦や驅逐艦は猛烈の砲擊を繼續した。斯くて米軍の塹壕や砲臺は四時間の間絶間なく砲擊され、其損害も大であつたが、日本軍に對しても亦大なる損害を與へた。日本陸軍先頭隊の端舟數隻が烟幕の中より現はるゝや大砲と機關銃の猛射を受け、爲に多くは沈沒し、其他のものは之に惱まされて的もなく漂流した。然も他の端舟は海岸に乘せ上げる迄突進し、カーキー色の小さな兵士は忽ち海中に飛込み、小銃や胴亂を頭上に上げ、喊聲を擧げつゝ海岸見かけて突進した。之を見たる米軍は十字火を浴せかけ、爲に日本軍は薙倒されて海岸には死傷者の山を築ひたが、日本人の波はじり〳〵と進んで米軍の前線にある塹壕を包み遂には之に滿ち滿ちた。新たな上陸者はつぎ〳〵と來り、發砲を繼續しつゝ濱邊に展開してこれ亦漸次に内部へと進み、爲に日本輕艦艇よりの掩護砲火は味方の前進と共に其目標を變更した。先頭の陸軍が上陸してより一時間經たぬ内に

日本軍は廣き前線に亘りて鞏固な地歩を得、其大砲やタンクは工兵により非常なる速さを以て揚げられつゝあつた。斯くて米軍塹壕線は日本軍の手に落ちたが、此等はダグバンが敵の上陸地點たるの恐れあるを始めて建言された數日前急速に構築したので、其位置不良なりしのみならず、淺くして防禦網なども充分でなかつた。されば同地に在る障害物は艦隊よりの砲火に依て六ヶ所は破壞され、日本軍の塹壕への侵入を容易ならしめた。

破壞された此等防禦物の後方に在つた米軍と其同僚たる比島土民軍とは强靱に抵抗し、爲に日本軍は二千を喪ひ、米軍側も亦艦隊の砲撃と其後の日本陸軍の攻撃とにより大なる損害を蒙り、五千の將卒中無事なる者は僅に二千であつた。生存せる士官の先任者アベニー陸軍大佐は此上抵抗を持續するを無益と信じ、南方に退却して馬尼剌を掩護しつゝあるオーネイル大將の下に合するに決した。然るにターラック街道に沿ふて退却中、米軍は終夜日本飛行機の攻撃を受け、此等の飛行機はマグネシユーム火を以

て米軍を照らしつゝ爆彈を投下し、時としては突如として下降し來り機砲を發射して米軍を惱ました。天明と共に日本のタンク隊來着し、其五個は米軍の後衛に追及して之を粉碎した。米軍は退却と共に後方の鐵道を破壞したが、此線路の數ヶ所は既に日本の飛行機により破壞され、正子少し前にカラショウを發した二個の汽車は、近距離に於て日本飛行機の攻撃を蒙り損害を受けてサン・カーロスとマラシク間に停車して居た。

二、日本軍のラモン灣上陸

以上の事件が北方に起りつゝある間に二十五隻より成る日本の第二の輸送船隊は呂宋の東海岸に沿ふて南下しつゝあつた。三月十二日午前九時此等の輸送船隊は之を掩護する巡洋戰隊や驅逐隊、飛行機と共にボリロオ島沖に來たが、之より先き五十浬手前の所に於て既に米國潛水艦S十一號同十五號の追躡する所となりしも遂に襲撃の機會を得なかつた。今や

輸送船隊はボリロオを右舷に見て西方に變針しヂョーマリグ島側を航過した。然るに此時先頭に在りし一輸送船は機關に故障を起したもの丶如く、突如として列外に出たので、將に後續船と衝突せんとして茲に隊列の混亂を來した。これ米國潜水艦にとり乘ずべきの機會である。茲に於て潜水艦は潜航して潜望鏡のみを現はしつ丶一千碼以内の距離に近づき、敵に發見せらるゝ前に八個の魚雷を發射した。此等の魚雷は近距離に於て發射されたので命中確實其六個だけは爆發し、輸送船四隻に命中した。之が爲め仙臺丸は二發の魚雷を受けて右舷に傾きつ丶明かに沈沒しつ丶あり、其前續船大阪丸は第一の魚雷に依て推進機を破壞され、第二のものは汽罐室に命中して運轉の自由を失ひ。其他春野丸は船首を沈下し、阿蘇丸は舷側の中央に破孔を生じ、何れも進退頗る困難であつた。而して後者は其後陸岸に擱坐して修理に着手した。

之を見たる日本の驅逐艦二隻が沈沒しつ丶ある仙臺丸に横付けして陸

兵を移乘せしめつ丶ある間に、他の驅逐艦は先を爭ふて潜水艦の搜索に向ひ、水中爆雷を投下した。然るに潜水艦は襲擊を決行するや否や、百五十呎に潜入して再び發射の準備を整へた。S十一號は艦に最も近く爆發した水中爆雷の爲に其乘員は跳ね飛ばされたが、尙も良好に操縱するを得て、十分後には後方の輸送船に四個の魚雷を命中爆發せしめた。之と同時にS十五號も亦其前方一浬の所に於て輸送船を襲擊し、魚雷の爆音は海上に響き渡つた。這回は三隻の輸送船に命中し、内一隻は陸兵を移す間もなく數分にして沈沒し、一隻は船尾より沈みかけ、他の一隻は機關を破損したか其損害は致命的で無つた。S十五號が最後の魚雷を發射するや日本の一驅逐艦は魚雷の氣泡の跡を辿り三十五節の速力を以て急航し來り、數個の水中爆雷を投下した。此爆發の震動は甚だ大にして潜水艦は殆んど水上に跳ね出され、直に日本驅逐艦の射擊を受けて船體は蜂の巣となつた。偶まハッチ昇降口は開かれ、一人の水兵は甲板上に匍ひ出でたが、忽ち數發の砲彈船體

に命中し、爲に潜水艦は最後の痙攣的突入をなしつゝ水中深く永久に其姿を沒した。唯一の生存者たる此年若き水兵は其後日本驅逐艦の一に收容された。

此時に當りS十一號は僚艦の不幸も知らずに再び潜入して魚雷を裝塡した。艦長ホックレー大尉は、日本の驅逐艦が血眼となつて有ゆる方向に已等を搜しつゝあると、飛行機も亦空中より同樣の搜索をなしつつあるを知るので、勿論其附近に行動するの危險を知つて居たが、併しながら敵の輸送船が陸岸近くに達する前に、出來るだけ之に損害を與ふることの最も重要なることをも知つて居た。玆を以て斷然其有する四個の魚雷を以て最後の襲擊を決行するに決した。大尉は其水中速力では既に遙か前方に在る未だ損害を蒙らざる輸送船に追及するの不可能なるを知り、敵を成るべく多く斃さんとして獨に損害を加へた輸送船に向つた。斯くて第一の輸送船に二發の魚雷を命中させたが、偶ま水中爆發の攻擊を受けて船體に漏

洩を生じ――又は漏洩を生じたものと推測した――水上に現出するの已むを得ざるに至つた。玆に於て敵の最近驅逐艦より一浬以上を離れた所に浮出したが、敵は精神興奮の爲か、又は恐らく海上の濛氣の爲に之を發見するを得なかつた。玆に此戰爭中の最も大膽なる行爲として日本人に賞讃された一事件が起つた。ホックレー大尉にして降伏せんとならば、日本人は元來義俠的武士なるを以て、此等勇敢なる降伏者の生命を完ふし、名譽を以て之を取扱つたに違ひない。然るに潜水艦は運轉の自由を失ひ、潜航も水上航走も出來ないが、唯だ砲だけを持て居るので、之を以て敵に一擊を加ふることが出來る。これ素より全乘員の戰死を意味するものであるがホックレー大尉と其部下は勿論喜んで死地に就くを選んだに違ひない。されば潜水艦は水上に現出するや否や、其昇降口は開かれ、彈藥は甲板上に運ばれ、四吋砲は忽ち最近の輸送船目かけて急速なる砲火を開ひた。日本驅逐艦は此不意の砲擊に驚ひたが、少しも狼狽せず、直に應射し、其二彈は勇

敢なる潜水艦に向て飛來した。此時潜水艦は水面上に停止し、其砲は連りに日本の艦船目懸けて發射しつゝあつた。日本の驅逐艦は凡そ二分間で潜水艦に攫み掛り得る距離に在つたが、此近距離でさへ尙潜水艦は連りに發砲を繼續し、其一彈を最近の驅逐艦に命中せしめた。斯の如くS十一號の砲手は鋭の如き意志と至大の勇氣とを以て、恰も平時の射撃演習に於けるか如く冷靜沈着に發砲を續けたが、然も刻々に迫り來る死の前には如何ともすることが出來なかつた。

此勇敢なる海戰の挿話は米人が皆戰死したので之を目撃した日本人側のみより之を聞くことを得るが、彼等は寔に公平な判斷を下して居る。日本驅逐艦乘組の一士官はS十一號の最後に就て次の如く書いて居る。

吾人は全速力を以て潜水艦に突進したが、此時迄輸送船いるせん丸を砲撃しつゝあつた該艦は其一門の砲を我艦目懸けて發砲し、爲に我艦は二彈を受け數名の戰死者を出した。次で飛來した敵の彈丸は命中を逸したが、此時我艦は敵に飛びかかつた。時に潜水艦の甲板には砲員と

共に多くの水兵あり、一人の士官は其手を組みつゝ司令塔内に直立して居た。彼等は我艦の衝突を受けた時にも彈藥を裝塡しつゝあつたので降伏の意志は素より無つたのだ。我が尖銳な艦首は司令塔後方の敵舷側に突入し、潜水艦を圓斷したので、艦は恰も石の如く沈沒したが、此衝動により我艦は或距離だけ推返された、然も潜水艦の沈沒した個所には氣泡と油が一面に漲つた。生存者は唯一人で人事不省に陷り、我軍醫が有ゆる手段を盡したにも拘らず間もなく死亡した。其他の乘員は渦卷の爲に、卷込まれたものの如く、一人も發見されなかつた。斯くて此勇敢なる潜水艦と其乘員は海底深く永久に沈み去つた。

斯樣に美事な成績を收め得た犧牲的行爲は此戰爭中甚だ稀である。此等二隻の中型潜水艦は日本の輸送船隊に恐るべき損害を與へ、其五隻は沈沒又は殆んど沈沒の狀態に墜され、他の二隻は重大なる損傷を蒙り、船内にある陸兵を他に移した後曳航された。最初の襲撃に魚雷を受けた春野丸は沈沒する迄に至らなかつたが、其後S十一號の恐るべき砲撃に依て遂に沈沒した。此勇氣なる潜水艦の爲め幾許の陸軍兵が斃れたかは今日に至

る迄不明であるが、日本人は二千人は溺死したと稱するも實際には尙多數であらふ。

此の米國潛水艦の行爲は疑もなく日本の呂宋島東岸に於ける揚陸を遲延せしめ、該島に在る米國の守備軍にして尙多數であつたならば一層重要なる影響を及ぼしたに違ひない。ヂョウマリグ沖の砲と魚雷の爆音は米軍飛行機の注意を惹起し、日本の輸送船隊が南方の航路を取りつゝあるより、ラモン灣に上陸せんとするものと判斷せられ、其旨無線電話を以て之を味方に報告した。此電報が馬尼剌の總司令部に達するや、四千の遊擊隊は野砲二大隊と共に鐵道によりバグビラオとラギマノクに送られ、又飛行隊は輸送船隊が陸岸に近づきつゝありとの通知あり次第出動し得る樣キャビテに待命せしめられた。時にラモン灣には機械水雷は敷設されてなかつた、將又此缺點を補ふべき他の手段を講ずるの暇もなかつた。只だ各所に上陸した敵が集合すべしと豫期された地點に塹壕を掘り、一握り程の陸

兵を之に配備した。輸送船内にある日本の陸軍は五萬と推算され、且艦隊の掩護砲火を以て敵の砲兵を壓倒するので、米軍は海岸附近に於て日本軍を喰止め得るの望みは無つた。されば上陸せる日本軍が馬尼剌に向け進むに當り通過せねばならぬカランバの隘路に總ての防禦を集中するを最良なる戰略と考へられ、上陸地點に於ける實際の防止は之を飛行機のみに委ねられた。

三月十二日午後五時日本艦隊の先頭隊は戰鬪機と爆擊機より成る頗る優勢なる空軍に先導されつゝカルバリートとアラバット群島間なるラモン灣に向て航進し來つた、此航空隊は同方面にある敵の飛行機と戰ひ、以て味方輸送船隊に對する彼等の注意を他に轉向せんとしたのである。然るに米軍の飛行機は一も之を發見するを得ないので、或機はボート・ラムボンの上陸地點附近を飛行し、他の者はバグビラオの米軍陣地を偵察して數個の爆彈を投下した。日本驅逐隊も亦上陸軍に抵抗する海岸附近の米軍を

擊攘せんとして海岸より二千碼以内に近づき、前面の森林に對して半時間砲擊したが何等の應射も見ないので其砲擊を中止した。此砲擊中止と共に日本の輸送船隊は灣内に向つて航進を始めた。時に四哩の高所に於て敵に發見せらるゝことなく日本軍の動情を偵察しつゝあつた米軍の一飛行機は、輸送船隊の灣内進入をバグサンヂヤンに待命せる二十機の味方飛行機に傳へたので、數分後には此等の飛行機は皆該地を離れ、海上目懸がけて全速力を以て突進した。日本の飛行隊は斯る攻擊を豫期して居たので、直に之を迎擊し、爲に海岸附近に於ては最も猛烈なる空中戰鬪が行はれた。今や兩軍の飛行機は入り亂れて混戰となり、米軍飛行機の半數は破壞又は操縱不可能となり、日本側の數機も亦破壞された。然るに米軍の十機は敵を突破して輸送船に向て猛進し、來り、内三機は艦隊の高射砲の爲に射落された。不幸にして這回は前夜リンガエン灣に於て味方の飛行機が收め得た樣な大成功を贏ち得なかつた、即ち日本の輸送船隊は尙數浬の彼方に在

り、其速力も亦比較的大で、加ふるに海面の狀況も亦蛇航運動を許したので米軍飛行機の攻擊を困難ならしめた。然るにも拘らず、一隻の輸送船は爆彈の爲め沈沒し、他の三隻は損害を受け、爲に少くも一千以上の陸兵は戰線に立つを得なくなつた。然るに米軍側ではこれ以上に敵の上陸を防害するを得なかつた。日本の輸送船隊は不毛の高地に對する艦隊の掩護射擊と優勢なる味方空軍の掩護の下に上陸地點に向て突進し、敵の抵抗を受けないので其揚陸作業は非常なる迅速を以て進行した。十三日未明には少くも三萬の陸兵と輕砲隊及タンクの大部は揚陸し、其數時間後には全部の揚陸終りを告げた。

三、馬尼刺の陷落

日本軍の内地への進軍と、米軍の小部隊が强靭なる抵抗の後事實上殲滅したカランバの慘たる戰鬪の狀況に就ては今玆に述ぶるの必要は無い。

米軍は苟も勇者が爲し得る總てを盡したが、十倍の敵に對しては衆寡敵せずして始めより絶望的であつた。リンガエンとラモンの二ケの上陸地點並に海岸附近に於ける其後の戰鬪に於て日本軍の死傷は恐らく一萬五千にも上つたが、之を米軍の兵力と比較すれば此損害は頗る大である。然るも尙日本軍は八萬の兵を以て北と南より馬尼剌に向け進みつゝあるのだ。次の數日間日本軍の前衞と米國狙擊兵の小部隊との間には無數の小戰鬪が行はれた。然るに三月十九日に至り避く可らざる最後の運命は遂に來た。オーネイル將軍が今や其麾下に餘す所の兵力は僅に二千以下に過ぎず、茲を以て將軍は馬尼剌の砲擊を免れんが爲に此日を以て遂に日本軍に降伏した。

オーネイル將軍の降伏は當時事情を知らざる米國批評家の的となつて連りに批難攻擊されたが、此決心が賢明にして勇斷の處置であつたのは疑を容れない、何となれば爾後の抵抗は全然不可能にして、之を敢てせんか、生

存せる少數の米人の生命を無益に犧牲に供するのみならず、生產力ある馬尼剌の人民をも破壞と死に迄導くからである。此降伏に先つ五日、馬尼剌に在る米國の驅逐艦と潛水艦はグワムに向つて突破することを命ぜられた。此等諸艦の多くは無事に該地に着したが、獨り潛水艦S十號のみは日本の機械水雷に罹りて爆沈し、又驅逐艦オスボーンは日本輕巡洋艦に追擊せられて擊沈された。舊式巡洋艦クリーブランドは封鎖艦隊の哨線を突破せんには餘りに低速であるので、機械故障の潛水艦S十九號と共に乘員の手により海水弁を開ひて沈められた。オーネイル將軍は降伏に先ち砲、飛行機等の軍用品を總て破壞することを命じたので日本軍の分捕品は甚だ小數であつた。日本軍は木村大將の指揮下に三月二十日馬尼剌に入城し、米軍の總指揮官並に其幕僚は勇敢なる防戰を認められて帶劍を許された。

此入城の前日約五千の日本陸軍は二隊に分れてミンダナオ島のシンダ

ンガン灣に上陸し、ザンボアンガに向つて進軍した。然もミンダナオ島の守備軍は義勇兵、警官隊を合せて僅に五千を超へないので有効なる抵抗を試みるを得なかつた。此同じ週間にサマール及パネー諸島も亦日本軍の手に落ち、馬尼剌附近の軍港カビテは佐世保より來着せる潜水戦隊の主根據地となり、其一部はミンダナオ島のダバオ灣を根據とした。加ふるに約五百の陸軍飛行機は比律賓群島中の戦略的要地に配備された。

斯くて三月末迄には日本は其戦爭の第一目標たりし比律賓群島の占領に成功し得たが、比島は實に過去三十年間米國の手中に在つたのだ。米國の戦略家等は比島が比較的日本に近きと、最も近き米國艦隊の大根據地より餘りに隔つて居るので、此等の群島が戦爭の場合速に日本の手中に落つるを覺悟して居たが、一般國民にとりては此占領は例へ豫期されて居たとは云へ痛切なる打撃であつた。彼等は最初呂宋、ミンダナオ、其他の島々に在る米國非戦鬪員の安全に就て大なる杞憂を懐ひたが、斯る杞憂は忽ちに

して無益なることが判つた。此等の群島が一度日本人の手に歸するや、彼等は外國人たると土人たるを問はず一般の住民に對しては甚だ穏和なるを示した。米國の人民は總て舊制度を以て律せらるべき保證を與へられて普通の職業に從事するを許され、數名の反抗者が日本へ送られた以外には、大部は其職に留らんことを願ひ、米國が速に其侵入者を追拂つて之を奪還せんことを確信を以て待ちつゝあつた。

國家の危急存亡に際しては何れの場合に於ても見るが如く、米國内に於ても亦所謂一夜漬の多くの戦略家等は、日本軍の占領未だ了らざるに米國政府が太平洋を越へて速に援軍を送らざる其優柔不斷の處置を攻撃しつゝあつた。彼等は米國艦隊にして此際西太平洋に入らば十中八九迄は再び歸還するを得ざる事を知らなかつたのだ。日本は其比島占領軍を送るに先ち之を妨げんとする米國艦隊に對して豫め之に應すべき手段を講ずるに非んば輸送船隊を出發せしめなかつた。即ち輸送船隊の日本港灣出

發に先ち太平洋の南西海面には一の哨線が航路の有ゆる線に於て張られてあつたのだ。小笠原島の二見港には日本の主力艦隊あり、マーシャル、カロリン、マリヤン群島を根據としては南方海面に對する哨艦として日本の巡洋艦、潛水艦、飛行機が配備されて居た。されば布哇より西進する如何なる米國の大艦隊も此哨線の眼を掠むるを得ないので、一度此等が發見されんか、日本の哨艦艇は恰も狼群の如く、有ゆる方面より茲に招致さるゝに遠ひない。米國艦隊は必要缺ぐ可らざる補給船や其他の特務船を隨伴するので低速を以て航行するを餘儀なくされ、爲に艦隊は日となく夜となく日本潛水艦の襲擊に暴露し、更に西進するにつれては飛行機の攻擊を受けざるを得ない。若し或米艦損傷して艦隊と共に西進を繼續するを得ざる時は其運命は素より云ふの必要はない。米國艦隊は西進の途上に大なる損害を受くるの公算あるのみならず、例へ其大部が無事目的地に達し得たりとするも、此長途の航海の終りに於て彼等を待つべき味方の根據地は無い

のである、否之に反して彼等は敵海に在るも燃料缺乏して之を得るの見込なく、況んや西太平洋に留まること一日長ければ長いだけ其危險を增し、不幸なる運命に近くの外はない。斯くて米國艦隊は日本の潛水艦、飛行機、機雷敷設艦等により其勢力を減殺されて日本の主力艦隊と戰ふ事となるべく、然も日本艦隊は其全力を以て已の欲する時機に之と戰ふを得るのである。されば米國海軍の高級司令部が如上の事情を明に認識して、遂には不幸なる結果となるべき艦隊の西進を抑制せしは素より至當である。加之ならず米國にとりては開戰後全二週間西太平洋方面は全然暗黑の裡に包まれ何等の情報にも接せざりし事實をも忘れてはならぬ、實に、日本の高力なる電波は米國との通信を妨げて比律賓方面とは何等無線電信の通信を行ふを得ず、グワムの無線電信所も亦三月四日以來沈默した。されば米國海軍の最高司令部は比島やグワムに味方の軍艦が尙生存せるや否やを知るを得なかつたのだ。勿論此二島が開戰後の數時間內に同時に敵に奪取

さるべしとは思はれざるも、併しながら日本の遠征軍は宣戰布告の餘程以前に此等の二島に近づき、米國政府が果して戰鬪行爲の始められたるや否やを疑問とせる、間に玆に上陸することは必ずしも不可能でない。之を事實に徵するにグワムは四月三日迄米人の手中に殘りしが故に、米國艦隊にして日本が戰爭の企圖を明白にしたる後直に布哇を出發せば、途上日本輕艦艇の防害を受けないと假定すれば、――斯る假定は到底不可能である――或は陷落前に該島に到着し得たかも知れない。併しながら米國の最高司令部は何等其狀況を知らなかつたので、實際の有樣が或程度に迄明かとなる迄は艦隊の西進を拒んだ。何となれば之を敢てするが如きは全然無謀の擧であるからだ。此のグワムの沈默した理由は簡單に云へば次の通りである。三月四日明かにサイパンより來れる日本飛行機の一隊はグワム島上に現はれ、マカナオの無線電信所に數噸の爆彈を投下し、全然之を破壞し、其信號用マストを折つた。此等の損害は甚だ大にして、到底該地にて

修理し得る程度のものでなかつた、加ふるに海底電信も亦其前日を以て、不通となつたので、グワムは今は全然孤立となつたのだ。爾後の成行に就ては逐次に之を說かんも、之に先ち吾人は先づ開戰初頭に於ける日米兩軍の兵力並に其戰略的對勢に就て少しく記述して見よう。

第五章　開戰初頭に於ける日米兩軍の兵力並に其戰略的對勢

開戰初頭に於ける日米兩軍の兵力――彼我兩國の遠隔より起る作戰の困難。

一、日本の海軍力並に其戰略的對勢

千九百二十二年の華盛頓會議は主力艦、航空母艦の建造競爭に止めを刺したが、補助艦艇に就ては遂に制限が成立たなかつたので、此等小艦艇の相對的戰鬪力は主力艦噸數の制限に依て生じた缺陷を補はんとして增大された。斯くて千九百二十二年以來各海軍國間には此等補助艦の競爭が起り、此補助艦隊を建造して古の奇襲戰術を踏襲せる小艦艇の新戰術を採用したが、此新戰術は遂には總てに代るものと思はれた。就中日本は斯る傾向の誘導となり、華府會議後數月にして先づ巡洋艦の大建造計畫を樹てた。

此計畫は千九百二十八年迄の繼續事業で、同年に至れば日本は十隻の主力艦に加ふるに次の補助艦を有することゝなる。即ち速力三十三節、排水量三千五百噸より同一萬噸に至る各種の快速巡洋艦二十五隻、及航洋型の驅逐艦約百隻、同潛水艦八十隻である。同時に又近世艦隊の保持及供給用としては、大規模の燃料船、給兵船、驅逐艦潛水艦の母艦、工作船、及其他の補助船舶を建造することゝなつた。然るに米國が巡洋艦の新建造計畫を定めた翌年の千九百二十五年に至り、日本は其自ら主張せるが如く、之と均衡を保たんとして更に增艦計畫を必要と認め爲に如上の計畫に加ふるに八隻の巡洋艦、二十隻の潛水艦を千九百三十年迄に建造完成せしむることゝしたが、實際に於ては其建造は甚だ迅速で、既に其滿一年前に全部、否殆んど其全部は役務に就くことが出來た。此時に當り米國は日本の海軍力が已を凌駕せんとするを見るや、之に對せんとして熱心なる努力を爲し、遂に千九百二十七年に至り、議會は長き論戰の後四隻の巡洋艦、二十四隻の大型偵察潛

水艦の增建を協贊した。之を見たる日本は之に對せんとして更に追加案を提出し、千九百三十三年迄に尙五隻の巡洋艦と、特に其隻數を明示せざる若干の潛水艦を增建することゝなつたが、此等の多くは戰爭破裂の當時には既に建造に着手されて居た。斯くて華府會議後の八年間に日米兩國の艦隊は實際に於て何れも增勢されて居たのである。

此の八年間に於て米國政府は二回補助艦の制限會議を開催せんことを列國に提議したが、其得たる回答は之を斷行するに時機未だ熟せずと思惟された。開戰初頭に於て日本は驅逐艦以外の補助艦に於て米國に比し明確なる優勢を有した、卽ち其快速巡洋艦は三十三隻で他に五隻は建造中に屬し、多くは航洋型なる百隻の潛水艦の外に二十五乃至三十隻の潛水艦は建造中であつた。獨り驅逐艦に於ては日本は米國に比し數に於て劣勢であつた、蓋し米國は合計二百七十五隻を有するに對して日本は僅に百隻に過ぎない、但し日本の驅逐艦は米國のものよりも最新式且一層有力なもの

である。次に航空母艦は如何と見るに、日本は米國に稍々劣つて居た。華府會議は此艦種の合計噸數を日本八萬一千噸、米國十三萬五千噸と定めたが、米國は二隻の巡洋戰艦を之に改造したので、既に六萬六千噸は之に割當てられ、殘り六萬九千噸は各々二萬三千噸のもの三隻を造り、合計五隻の航空母艦を有することゝした。日本も亦同樣の政策を取り、各々二萬七千噸の主力艦加賀、赤城を航空母艦に改造し、殘り二萬七千噸は九千五百噸の鳳翔及六千噸より稍々小なるもの三隻を造つて之に割當てた。此中加賀、赤城は各々二十四及二十八節の速力を有し、五十機づゝの飛行機を搭載して居る。又小型の航空母艦三隻は計畫速力二十八節で各々飛行機十五機を搭載することが出來る。されば日本は航空母艦としては高速力のもの六隻を有て居たのである。

日本の潛水艦には三種類がある、內中型のものは排水量七百乃至千百噸で、七千乃至九千浬の行動半經を有し、大型のものは千五百乃至二千五百噸

で中型と同樣な行動半經を有て居る。尙此外に巡洋潛水艦がある。此巡洋潛水艦は千九百二十五年に始めて日本海軍に紹介せられたもので、本來は獨逸の設計になり、既に其六隻は開戰當時に完成し、他の二隻は建造中であつた。此型は特に嚴秘に附せられたので、其恐るべき戰鬪力に就ては日本以外には不明であつた。之より纔千九百二十四年中歐洲方面に派遣された日本の海軍委員は、獨逸に於ける潛水艦建造の屈指の專問家の一人なる伯林のオットー・シュラム博士より、當時世界に現存せる何れの潛水艦よりも大なる巡洋潛水艦の完全なる設計圖の一對を得、同時に獨逸のエンジニヤー數名は日本に傭はれて此の大なる潛水艦と其機關の製造を監督することゝなつた。此内第一のものは千九百二十五年の春吳海軍工廠に於て起工され、其長さ四百五呎、幅四十五呎、水上排水量七千八十噸である。又其速力は二萬九千馬力のヂーゼルエンジンを用ひて水上速力二十三節、電氣推進機關を用ひて水中十一節である。司令塔の前部には低き砲塔があつて八吋二百五十听砲二門を備へ、電氣を以て之を操縱し、砲は艦尾以外何れの方向へも發射することが出來る。其他四吋速射砲三門が備へられて居る。又甲板上には二門の魚雷發射管あり、水線下には尙八門の發射管がある。各八吋砲には一門に付五百听の火藥、十門の魚雷發射管には各々四個の魚雷が準備されて居る。水に司令塔、砲塔は厚き裝甲を以て之を掩ひ、水上航走中外部より見へ得べき甲板の全部も亦同樣である。此鋼楯は最大口經砲を以てするに非んば之を穿貫するを得ない。また其船體は爆彈や水中爆雷に對して特に堅固に造られて居る。其他充分の燃料油を蓄へ中庸の速力を以てすれば二萬四千浬を航破することが出來る。此巡洋潛水艦は其重量頗る大で、長さも亦大なるにも拘らず訓練良好なる乘員を以てすれば其十分の一の排水量を有する潛水艦と同樣に操縱し得ると想像され、又深水に於ては二分以内で潛入し得た。此の驚くべき巡洋潛水艦は長崎と命名され、他に五隻の同型艦も該艦の試運轉終了以前に起工された

が、内一隻は機雷敷設用で、二門の重砲の代りに數門の速射砲と二千五百個の機雷を搭載して居た。日本以外の如何なる海軍國も此六隻に匹敵する排水量と戰鬪力とを有する潛水艦を有するものはない。然しながら後說するが如く此等の戰鬪力は餘りに過大視された傾がある。

（註）此時期に於ける完成又は建造中の日本の全軍艦は卷末の附表にある。

日本海軍の常備員は士官七千五百、下士官、兵七萬人である。茲に注意すべきは士官の數が下士官、兵に比して著しく大なることで約九人に對して一人の割合であるが、米國海軍では之が僅に十七人に對して一人の割合となつて居る。此の著しき差違は、日本が戰時に必要なる全定員――幕僚も特科士官も――を常に乘組ましめ置く習慣に基くものである。之と同樣に下士官、兵も亦常に戰時全定員數の九十乃至九十五％を乘組ましめて居る。此種の方法は平時に於ける艦隊の維持費を增すの不利あるも、常に戰備完成の狀態に在るので、動員の如きは僅に數時間あれば充分である。此

常備員の外に約五萬の豫備員があり、此等は第一豫備員たる七ケ年中は毎年平均十五日間の訓練を受ける。日本海軍の軍紀は一時は非常に良好であつたが近年に至り稍々衰へた、これ恐らくは水兵を出す所の人民中に反軍事主義が擴まつた爲であらふ。但し其人員の萬能的特質に於ては他の海軍國に比して遜色は無ひ。日本の海軍士官は良好に教育され、精勵にして職務に熱心である。其兵は才智に富み、之を適切に導けば從順にして職務に忠順である。其技術的教育も亦、鞏固たる方針の下に行はれて居る。日本人は生れながらの技術的國民でないが、模倣に巧みで、其海軍々人も亦海上戰爭に適用さるべき複雜なる今日の技術を習得することに於て兎に角成功した。彼等は大砲及魚雷の發射術にも合格し、軍艦の設計と建造、其他機關、艤裝も亦最良なる西洋式を採用し、或場合には之に改良を加へた。就中最も進步したものは飛行術で、戰爭の前年迄に海軍飛行隊の人員は千二百人の操縱手と九百の飛行機を有し、其多くは今日用ひられて居る外國

の最良なるものに比して劣る所は無ひ、國内の飛行機製造會社も亦非常に發達して、毎月百五十機は難なく製作することが出來る。此等の海軍用飛行機中特に著しき物は一噸半の爆彈を搭載し得る大型爆彈投下機朝日と、各々二十三吋の短魚雷二門を有する有力なる魚雷發射機數機である、其他日本の商船隊は一千噸以上の排水量を有する蒸汽及發動船約一千隻より成り、其中には快速の大商船も可なり有る、此等の多くは假裝巡洋艦、補助航空母艦等に使用する爲め海軍に徴發された。

轉じて日本の戰略的位置を觀れば米國との戰爭には實に理想に近きものである。見よ、防備を有する米國最近の海軍根據地布哇と横須賀とは三千四百浬を隔て、北に於ては琉球列島南に於ては臺灣に至る迄海軍根據地たるに適する連綿たる島嶼の城壘は外方よりの攻擊に對して日本を守つて居る。亞細亞の東海岸を洗ふ所の海面の大部も亦日本の掌中に在る、北より數へてオコツク海、日本海、黄海及東海の如き皆然りである。今や比律

賓が日本軍の手中に歸するに及んで日本の手は更に南支那海に迄延ばされた。されば日本艦隊が現存する限り、亞細亞大陸との重要なる交通線は絶對的に安全である。加之ならず日本は又小笠原島及赤道以北の獨領南洋群島を有することに依て一連の實在的又は潜勢的の海軍根據地を有て居る、然も此等は東太平洋よりする船舶の航路の横腹を衝くものである。日本の敵が採り得べき唯一の航路は北東よりするもので、此航路は日本水雷艦艇の危害半經を避けて日本に近づくことが出來る。

前哨線たる此等日本諸島の多くはこの數年以來之に堅固なる防備が施された。委任統治の規定に依れば太平洋に於ける日本の舊獨領諸島は之を軍事上に使用することを禁ぜられて居るが、斯るは戰雲急なるに當つて何等の權威をも有するものでない。日本は米國が此等諸島の幾つかを前進根據地用に占領せんことを恐れて、千九百三十一年の二、三月中之が對策を講じた、即ちヤップ、ヤルート(マージャル群島)及サイパン(マリアン群島)の

如き最も重要なる島嶼には數門の砲を据付けた、但し敵を遠距離に保持せんが爲には主として航空機と潜水艦に依賴した。

二、日本の陸軍力

抑も海權の如何が今や展開せんとする日米戰爭の運命に主要なる任務を擔ふものなるは明白なるも、陸軍力も亦看過す可らざる要素である。此日本陸軍の主任務は日本が食料や原料品の大部を得んとする亞細亞大陸の供給地を安全に保持するにある。然も此等の供給にして遮斷せんか日本は戰爭を繼續するを得ない。茲を以て日本が支那に於て自己の張繩內なりと主張した地方は、外部の干渉に對して適當に之を防禦することは至緊至要である。特に支那が日本より蒙りたる過去の損害に復讐せんとして機を見て如上物資の供給を拒絕する時に於て然りとする。此戰爭に對する支那の態度は尙未だ聲明されないが、惡意を有する中立國たることが

關の山たるは日本政府の充分に知悉する所であつた。加之ならす戰運若し日本に不利ならんか、支那が日本に對して劒を執て起つは明かである。然も斯の如き不時の災厄は支那陸軍の兵力と能率とが前章に說けるが如く漸次に發達しつゝあつたので日本にとりては一層恐るべき物であつた。果して然らば大陸より必要なる物資の大部を得んが爲に、日本陸軍の大部が滿洲や蒙古の守備に拘束せらるゝは明かである。されば戰爭の進行につれて支那の態度が日本に對して益々脅威的となるや、六個師團以上の日本陸軍は支那領土內の種々の中心點に配せられた。加ふるに有ゆる日本の外交術は露國との親善關係を增進せんことに指向された、實に日露兩國はこの十年間餘り親和的でなかつたのだ。開戰初頭に於て莫斯古政府は中立を宣言したが、然も茲にも亦日本は深意の知れざる友邦を持ち、戰運日本に不利ならば公然敵に變化し得るものである。日本にして其全力を保持する間は敵意を包める大陸に於ける此等の二隣國を壓迫することが出

來よう實に日本が全盛の時代に於ては日本は此等二國を開發し壓迫するに何等の躊躇もせなかつたのだ。然も今や此死生存亡の戰に臨んでは、露支兩國の一又は双方より干渉を受くるの恐れは日本戰略家の扼憂する所となりて著しく軍事上の決心に影響した。日本が此數年以來踏襲し來つた高壓政策の結果の如何なるものなるやを充分に開顯せんとならば戰爭の苦き試驗に照して之を知ることが出來る。日本は今や不幸なる戰爭に面して背後より恐るべき一擊を加へんとする敵を以て圍繞されて居たのである。

然しながら日本が防禦すべき薄弱なる一翼は唯一支那のみでない、否朝鮮に於ても開戰早々重大な援亂が起つた。即ち朝鮮獨立黨は千九百三十一年四月革命の烽火を擧げ、これに成功したので三個師團の陸軍は急ぎ日本より派遣された。此革命は烈しき戰鬪の後鎭壓されたが、朝鮮人の憤怒の爲め一聯隊の兵をも引揚ぐることが出來なかつた。加ふるに他の援亂

は臺灣にも起つた、該島の住民は常に日本の統治に反抗しつゝあつたのだ。斯くて此所にも亦大に其守備軍を增したので、全體に於ては十一師團——日本常備陸軍の七十%——以上の者は實際に於て動員することが出來なかつた。併しながら斯樣な者を除ひても尙日本の陸軍は非常に恐るべき優勢なものである。即ち第一豫備軍を召集する時は戰線に使用し得べき陸軍力は八十萬となり、其背後には百四十萬の第二豫備軍ありて、其大部は訓練を經たものである。千九百十四同十八年の世界大戰以來陸軍々備は著しく改良され、工兵輜重及特科隊は最新式のものに編成され、最新の兵器を持て居る。十年以前に創設されたタンク隊の如きも今は輜重のタンク百二十個を有し、其他陸軍用飛行機の如きも約八百機は使用し得るのである。されば戰爭例へ大規模の陸戰となるも日本は有利の位置に在つた。加ふるに海上よりの敵襲に對して日本々土の沿岸を難攻不落ならしめんが爲めには、遲滯なく其防備が施されたのは云ふ迄も無い。主要なる總て

の港や戰略上の水道等も亦重砲を据付けた堅固な砲臺を以て之を守つた。此等の固定防禦の外蜘蛛の巣の如き鐵道網は敵襲を受けた何れの海岸へも軍隊の大部を迅速に集中することが出來る。

三、米國の海陸軍力並に其戰略的對勢

以上余輩は日本の使用し得る兵力と其顯著なる戰略的對勢とを略述した、卽ち筆を轉じて米國側を觀察して見よう。

米西戰爭の數年以前迄米國海軍の任務は沿岸防禦であるかの如くに取扱はれた。其後千八百九十年に至り、海上の砲臺としては有力なるも航海と外海の戰鬪には全然不適當なるモニトルの數隻を建造せんが爲め、利用し得べき經費の大部を之に充てんことを提議されたが、結局此等の艦型は取止められて航洋甲鐵艦の數隻を造ることゝなり、之が米國戰艦隊の中堅となつた。次で太平洋に於ける西班牙の植民地を獲るや米國海軍の任務

は大に增大した。卽ち最早本國沿岸防禦の問題のみに止らずして數千浬を隔つる洋上の米國屬領をも防禦せねばならぬ事となつたのだ。就中外國の侵略に對して如何にして比律賓を安全ならしむるかは第一等の戰略的問題となつたが、事實を云へば米國人は眞に之を解決しようともせなかつた。之を解決せんには此等新植民地の經濟的價値に比して莫大の軍費を要じ、兎に角其海軍を著しく增勢するのみならず、同時に亦高價なる局地防禦をも施さねはならぬ。然も此等の手段が果して問題を解決し得るやは疑問である。米國の海軍士官等は比島が艦隊と要塞の力に依て之を防禦し得るやを常に疑問とした、否波等は該島に想定敵國が派遣し得ると同等の陸軍を永久に常備するに非んば到底防禦覺束なしと觀た、然も斯の如きは米國輿論の欲せざる所である。第二策としては比島若くは附近の島嶼に、西太平洋に優勢なる米國艦隊を維持するに足る設備良好にして防禦堅固なる一海軍根據地を建設するにある、何となれば斯樣な艦隊の現存、又

は結局に於て到着すべしと豫想し得るに於ては敵の侵略計畫を阻止するに足るからだ。玆を以て米國の戰略家等は馬尼剌灣内のカビテ、又は一層良好なるグワム――馬尼剌の東方千五百浬に在るマリアン群島中の一島――の擴張を緊要と考へ、此目的に對して特種の計畫を當局に進言する所あつたが、何等の結果をも見なかつた。蓋し米國人は事實の眞相を知らなかつたか、又は此等の遠隔せる屬地は偶然に獲たので、其運命に就ては無感覺であつたのだ。斯る理由によりカビテは近世艦隊の保持と供給に關する設備なき三等根據地として放任され、グワムは防備を有せざる單なる燃料供給地として殘された。

此の消極政策は千九百二十年迄續ひたが、同年に至り議會も遂にグワム島の防備を增大し、其他アブラ港を艦隊根據地に適する樣其施設を改良するの豫算案を承認した、此計畫が結局は該島を一等根據地たらしめんとする第一着歩であるのは信ずべき有ゆる理由がある。然るに此最終の計畫

は千九百二十二年の華府會議に依て調印された太平洋に於ける五國條約で豫防線を張られた、蓋し該條約は比律賓とグワムを含む特定の地域内に要塞及海軍根據地を新設するを禁じ、且海軍力の修理、保持用としての現存の施設並に此等の諸島に於ける防備の現狀を增大するを禁じたからである。此制限の結果は東太平洋より該方面に向ふ米國艦隊を實際上に阻止することゝなる、何となれば近世の艦隊は遠く根據地を離れて作戰することゝ不可能であるからだ。實に艦隊の行動半經は燃料搭載量の如何に依て大なる制限を受け、特に戰時に於ては高速を用ふるを普通とするを以て燃料油並に石炭の消費量は多大である。

太平洋に於て大艦隊の根據地たるに適する必要なる施設を有するものは唯一ホノルゝのみで、そは桑港を距ること二千百浬である。此根據地を中心として艦隊は千五百乃至二千浬間を行動し得るも、之より以上の距離に於ては歸航に要する燃料に不足を告げ、戰時に於て燃料を節約せんが爲

め低速を以て航行する時は敵潛水艦の容易なる餌となるの恐れがある。されば比島もグワムもホノルルに據る米國艦隊の手を以てする保護區域外にあるは明かで、實に前者は布哇より四千八百浬、後者は同三千三百二十五浬の距離に在る。

開戰初頭に於て米國は排水量二萬千八百二十五噸乃至三萬二千六百噸の戰艦十八隻、輕巡洋艦二十二隻、驅逐艦三百隻以上、並に百二十五隻の潛水艦と五隻の大型航空母艦を持て居た。其海軍々人は海兵を含む有ゆる種類の者を合せて約十一萬五千人である。由來米國海軍の短期服役法は之に害毒を與へた。軍艦の乘員を一人前の人間となさんには六ヶ年を要するとは一般の定說であるが、米國の水兵は僅に四年間服役し、再服役は甚だ少數である。斯くて每年多數の入隊除隊者を出すの結果は一般に訓練及能率の低下を來した。玆に於てか右の服役年限を最少六ヶ年に改良せんとするの擧が幾度か試みられたか、議會は千九百二十九年迄は之に承認を

與へなかつた。されば此新服役法の成績は開戰前迄は現はれなかつたのだ。開戰當時に於て軍籍にある人員の約四十%は三年以內の服務者であつた。斯る有樣に於て米國海軍の訓練と敎育とが、大部は志願兵で少くも六ヶ年間服務せる日本海軍々人と同樣に高き標準にあつたと斷言するは明かに誤つて居る。勿論米國の水兵は敏捷にして機械的方面の仕事に一層適して居るは事實なるも、此利益は訓練の著しき不足を補ふに足らない。智識は困難なる戰爭の試練に依て速に之を得ることは出來よう、然しながら米國海軍が此服役法より起る不充分なる訓練の爲に開戰初頭に於て痛くハンデキャップされたのは之を否認するを得ない。

千九百三十一年に於て議會の協贊を經た米國の平時陸軍力は十萬人に稍々足らなかつた。大戰中に得たる經驗を利用して米國陸軍は其編成、訓練及戰備の何れに於ても世界の何國にも劣らざる優良なるものであつた。護國軍卽ちミリシヤの正規兵力は四十二萬五千人と規定されて居るが、未

だ此數に達せずして千九百三十一年には僅に二十萬人に過ぎなかつた。由來米國陸軍の潛勢力は偉大なるものである。世界大戰の終期なる千九百十八年十一月に於て武裝せる陸軍兵は其數三百六十萬に達し、其他尙召集し得べき多數の壯丁が殘つて居た。信すべき記錄に依れば當時に於て軍籍に在る全陸軍兵は二千四百萬以上であつた。米國は借すに必要なる時日を以てすれば全然自國のみでも世界最大の陸軍を創設、編成及裝備することが出來る。强制的徵兵制度は日本との開戰直後迄其施行を留保されて居たが、此時より以來大陸軍力の使用は其機會少るべしと見へたので、陸軍の最大兵力は守備軍を除いて假りに一百萬人と定められた、但し開戰後數ケ月を經過する迄は此數に達せなかつた。

米國が今正に當面しつゝある戰略上の諸問題に就ては左に之を簡單に記述して見よう。日本が米本國に對して重大なる或種の攻擊を加へんとするが如きは素より問題とならない、何となれば其距離は餘りに大にして、

日本艦隊も亦海を超へて米國の聯合海軍力と戰はんには不充分であるからだ。玆を以て戰略上の原則を無視した或著者等が煽動的に斯る夢想を畫ひたにも拘らず、日本が太平洋沿岸傾斜諸州に侵寇を企圖するが如きは理論上不可能で、米國陸海軍部內の意見も亦之を認めた。加ふるに布哇の安全に就ても之を恐るゝの必要は無ひ、何となれば太平洋に於ける米國海軍の主根據地に對して、日本が三千四百浬の大洋を超へて遠征陸軍を送るが如きは信ず可らざる事であるからだ。されば米本國の沿岸も布哇も重大なる軍事上の攻擊に對しては不可侵と見ることが出來る。併しながら只單に防禦に立つのみでは戰勝を得る所以の途でない。否最後の勝利は武裝せる敵軍を擊破し、要すれば封鎖の壓迫を敵に加ふることに依てのみ得らるゝものである。此の二者の何れかを達せんとならば先決問題として西太平洋の直接の戰域に數個の海軍根據地を占有することが必要である。然らば斯る根據地は何れに之を求め得る？　玆に問題の關鍵が在る。

米國にして比島とグワムを失はんか、布哇以西に於ては海軍根據地たるに適する其の屬地は無ひ。見よ布哇の北西千百二十六浬にあるミツドウエー島は日本近海より餘りに遠く離れて居る。布哇の西二千浬にあるウエーキ島は一の珊瑚礁に過ぎずして素より大艦を泊せしむるに足る泊地が無い。されば斯る根據地は勢ひ之を日本の領土内に求むるの外なきは容易に之を知ることが出來る。然るに此日本の領土内に於てさへも其選擇は著しく制限されて居る。卽ちマーシヤル群島は戰域より餘りに離れて居るのと、之を根據として作戰する米艦隊は、附近の日本諸島に在る潛水艦の哨線を突破すべき不利あるを以て適當でない。カロリン群島のポナペも亦同樣で、加ふるに該港に於ける水路の狀態は之を擴張して大艦の根據地とするに適せない。ペリユー群島のアンガウルは距離上の關係は適當なるも、附近に在る日本諸島の爲め、之に至る有ゆる航路を側擊さるゝ恐れがあるので放棄された。グワムは既に日本の根據地となれりと推定し

得べく、マリアン群島中には他に充分良好ある泊地を有する港が無ひ。玆に於てか後章に說くが如く小笠原島は戰域內に於ける唯一の根據地として撰定され、米國艦隊は之よりして敵海附近に於ける作戰行動を取るることゝなつた。

甚だ僅かの改良を施してあるに過ぎない。該島は北々東より南々西に擴がること約三十哩、其幅平均六哩半で面積二百八平方哩である。島の北方は海面上三百乃至六百呎の高地で、東西の海岸に沿ふて最も高く、茲に險峻なる數個の岬が海中に突出して居る。此島は遠方より見れば平坦なる樣に見ふるも北方に至るに從ひ高くなり、茲に數個の山がある。サンタ・ローサ（八百七十呎）マチナオ（六百十呎）及マタガック（六百三十呎）の如きそれである。就中マチナオは最北部にありて無線電信所が有るが、日本飛行機よりの最初の爆彈により破壞されたのは既記の通りである。然るに島の南方は山多く、茲に何れも一千呎以上の險峰アルタム（偵察山と別名す）チヤカオ及チンコがある。島の最高峰はヂヤムロン・マングロー山で海拔約千三百呎である。多量の清水はアガナ附近の爆布より之を得ることが出來る。島の西岸には山岳と海岸との間に起伏する開豁地の一帶あるも、東海岸は險峻にして凸凹多く、唯一のタロホホ港のみ船舶の避難所となる、

此港は之に流入する同名の河より名づけられたものである。該灣の兩側は嶮しき山に依て側防され、其水深亦六乃至八尋で、船舶は安全に入港する事が出來る。タロホホの南方には大船の碇泊に適する港は無ひ、これボート・アヂヤヤン沖にある暗礁の爲である。此のアヂヤヤン港は島の東南端に在り、天候良好なるに非んば入港するを得ない。アヂヤヤン港の西方數浬に亙り、ココス島を圍んで北方に擴がる他の暗礁がある、而して此暗礁の彼方にはウマタ灣がある。該灣は西方よりの風には浪荒ひので入港に危險である。ウマタには二個の破壞した城塞あり、一は南方の入口に在りて Nousfra Señora de la Soladad. と呼び、他は北方の高地に在りて Fort San Angels. と稱する。該港は昔は可なりの市街であつたが千八百四十九年の地震で破壞された。ウマタの北方八浬にアゲート灣がある、該灣は西風時以外船舶の碇泊安全なるも、前面に多くの礁脈ありて敵軍の上陸運動を困難ならしむる。尙北方數浬にオロト半島あり、グワム島の最大にして最良港なる

アブラ港の南方境線を形成して居る。アブラ港は幅約三浬半でオロト半島と多少並行する所のカブラス島とルミナオ礁とを以て北方の界線を爲して居る。港內水深きも砂洲、珊瑚礁、小島散在し、爲に出入港には大なる注意を要する。灣口の岩石上には西班牙時代の煉瓦式城砦フオート・サンタクルーズあり、オロト岬にも第二の城砦サンチアゴがある。此等の城砦は外海よりの砲擊に暴露するを以て米人は之を修理せなかつたが、二門の新式六吋砲を有する土壘をオロト岬に築設し、半島の東端に近きスメー及港を見下ろすアタンタノ上部の山上にも同樣の砲臺を設けた。斯くて港口は六門の六吋砲を以て防禦され、內四門は港內を瞰射することが出來る。島の主府アガナはアガナ灣岸にある。該灣はアブラの東北八浬にある淺くして長き灣で、外海の長濤に暴露するから船舶の避難所とならない。アデラツプとアバーグアン岬間の中程に在るアガナ市は約六千の住民と三百の建物を有し、玆に總督の官邸、工廠及兵營がある。アガナ灣より島の最

北端リチヂアン迄は海岸は險岨にして通行を許さず、其間に只一のチュウムン灣がある。該灣の一部は礁脈を以て圍まれて居るが、二三の水道ありて端艇を通航せむるに足り、且其海岸は上陸に適して居る。グワム島の守備兵は二千の米國海兵より成り、其大部はアガナに駐屯し、又アプラの防備をも擔任して居る。海岸砲臺の砲以外に數門の輕野砲及機砲がある。

二、米國潛水艦運送船のグワム島到着

三月四日日本の飛行機がグワム島のマシナオ無線電信所に爆彈を投下して之を破壞した以來、約二週間の間は該島には何事も起らなかつた。勿論サイパンよりする日本の飛行機は時々島上を飛び去つたが爆彈を投下せなかつた。グワムには僅に八機の米國飛行機があるに過ぎないので、總督は萬一の場合に備へんが爲め日本飛行機との戰鬪を禁じた。然るに三月十八日の朝アルタム信號所の哨兵は南方の水平線上に烟の昇るを報告

したので偵察の爲め直に一臺の飛行機を派遣した。この烟は馬尼剌落城に先ち同灣を逃走した米國驅逐艦デントラムバートン及ライザル(機雷敷設驅逐艦)がグワムに向ふ物であつた。此等の驅逐艦はオロート岬の西方約十浬に達した時突如速力を早めつゝ蛇航運動をなし、烟幕を張り、數分後には嚮導艦は砲火を開き、且水中爆雷が爆發したのを認められた。陸上の哨兵は此等の驅逐艦が敵潛水艦に襲撃されつゝあることを知つたが、三隻とも高速を以て航進し來るより見れば敵の襲撃は失敗に歸したものと思はれた。然るに二番艦デントがオロート岬と並んだ時、該艦の右舷側に水柱高く揚り、次で爆發の音響を耳にした、魚雷が艦の中央に命中したのだ。斯くて該艦は迅速に沈沒したが、他の二發の魚雷は辛ふじてライザルを逸した。此二艦がカブラス島沖に繫留し終るや、艦長は直に陸上の總督米國海軍大佐ハーバー氏を訪ふて比律賓に對する日本軍の攻擊を報告したので、大佐は玆に始めて比島方面の悲むべき情況を知つた。驅逐艦脫出の當

時に於ては馬尼剌は尙抵抗を持續しつゝあつたが、そは時間の問題にあらずとするも只だ時日の問題であつた。されば這回はグワムが已の番となりて刻々同樣の運命に陷るは何人にも明かである、然も現有の貧弱なる防禦の方法では日本軍に對して到底有效なる抵抗を爲し得る望みは無ひ。

驅逐艦と同時に馬尼剌を出發した米國の二潛水艦は未だに到着せない、其低速より判斷すればアプラ着は尙二三日後なりと思はれた。

三月十八日午後一時アルタムの哨所は再び西方の水平線上に烟の昇るを報じたので飛行機に偵察を命じた。間もなく此烟はアプラに向ひつゝある二隻の貨物船で、大砲、機雷其他の軍需品を積んで二月中に桑港を出港した米國海軍の運送船ニューボート・ニュースとビューフオートなることが判つた。ビューフオートの速力は八節以上を出ないので、同航した此二隻の航海日數は頗る長きものであつた。斯くて三月九日比島の東方七百浬の地點に達した時一隻の獨逸汽船に會し、馬尼剌に於ける米艦隊全滅の

報を聞ひた。今若し依然比島に向はゞ日本軍の手中に落つるは確實であるので、運送船は針路を反轉してホノルゝに向つた。然るに石炭缺乏し、加ふるに十三日の薄暮には日本の潛水艦らしきものを發見して漸く之を避けたが、翌十四日には更に他の疑はしき一船が東方の水平線上に檣のみを現はし、爲に東方への航路は遮斷されて居る樣に見へたので、今は到達し得る可能性ある唯一の避難所グワムに向ふの外はない。茲を以て長距離無線電信機を有するニューボートニュースは之を以て幾度か該島を呼んだが更に返信を得なかつた。これ卽ち何れかに故障あるを示すもので、グワムも或は既に日本軍の掌中に歸して居るかも知れない。然るに二船の石炭は迅速に減少し、僅に數日分を餘すに過ぎないので、今は虎穴に入るの危險を冒すより採るべき途は無つた。茲を以て二船は敵に會せば自ら船を沈めることに決心して該島に向針した。然るに幸にも其後何事も起らずして十八日の午後にはグワムの島影が見へた。此二船に會せんが爲めグ

ワム島より派遣された飛行機が附近に日本潜水艦あるを警告したので、二船は最大速力を以て蛇航運動を爲した。間もなく米國驅逐艦ランバートン來會し、高速を以て二船の周圍を圓航しつゝ水中爆雷を投下した。此護衛艦の爲に二船はアプラに無事入港するを得、其貴重なる積荷を全速力を以て荷揚げした。十九日日沒迄に十二門の七吋砲と八門の六吋砲は其特製砲架及前車と共に陸揚され、其他十五門の野砲、十門の三吋航空機射擊砲、五門の輕重機砲及多量の彈藥も亦陸揚された。右の內七吋砲は特に有力なもので、世界戰爭中舊式戰艦より移して陸上用に使用し、長さ二十五呎、百五十三听の彈丸を四十度の仰角を以て約十四哩の最大距離に發射することが出來る。之には各々百二十馬力のガソリン前車ありて、如何なる山も凸凹な開豁地にも之を運搬することが出來る。されば該砲の移動力と大射程は海岸砲に最も適し、最大戰艦以外の軍艦に對抗するを得るので、若し比律賓にも此種の砲臺二三個があつたならば日本軍の攻擊は頗る困難と

なり、一層大なる損害を蒙つたであらふ。

グワム島の現總督にして指揮官たるハーバー大佐は米國海軍大學校に於ける教官時代、戰略戰術上に多少舊套を脫せる獨創的意見を有するので名聲を馳せた人であるが、今や之を實地に行ふの機會は到來したのである。之より嚮き二年前グワム島總督の任に就くや、大佐は熱心に同島の防禦法を攻究した。元來該島の地形は敵の軍艦に對して最も適切なる砲臺を築設するに適し、且良好な上陸地點の數も少ひので、遠距離射擊用重砲の砲臺數個があつたならば、之をして殆んど難攻不落たらしむることが出來る。不幸にして此等の砲臺築設は華府會議前には看却され、同會議に於ては遂に防備の現狀維持を約定したので、敵軍艦を遠距離に防がんには今は移動式重砲を以てするの外なしとは大佐の意見であつた。されば此二隻の運送船が齎らした大口徑砲は恰も時宜に適したもので、其勸迎されたるは言ふ迄も無い。大佐は防禦問題を攻究した後次の結論に達した、卽ちグワム

島を占領せんとする敵軍は上陸地點として恐らく東海岸に於てはタロホホ、西海岸に於てはアプラ又はチュームン灣を選定すべく、次策としては之よりも實現の公算小なれども、西海岸に於けるウマタ、アゲート及アガナ灣の何れかを採るであらふと。此等の諸地點には何れも敵軍の近接を撃退し得べき重砲はないが、敵軍の企圖が明かとなる迄には多少の時間ありと想像されるので、前記の七吋砲を所要の方面へ運搬することも出來る。幸にも海兵の大部は既に米本國に於て該砲の取扱に熟達して居たので、急に砲員を編成し、且三門宛を以て小隊を編成し、之に必要なる人員や彈藥を輸送する前車を附屬せしめた。茲に防禦上の弱點として如何ともする能はざるものはグワム島に於ける米軍飛行機の數甚だ貧弱なるの一事である。若し日本の占領軍にして優勢なる飛行機を伴ふ時は、米軍の砲や砲員は日本飛行機の爆彈に暴露して大なる損害を蒙るべく、然も僅に二千の守備軍を以てしては斯る損害を補充し得るの力は無ひので有效なる防戰を爲す

を得ない。三月二十日早朝驅逐艦ライザルはビューフオートより陸揚した一百個の機械水雷をアプラ港口に敷設した、次でタラホホ沖とチュームン灣にも之を敷設せんとしたが、之に先ち日本軍の攻撃は始まつた。

三、グワム島に於ける日本軍上陸の失敗

此日本軍の先驅を爲したものは西北方より來た四臺の飛行機で、二十日午前十一時六千呎の高さを以て島上を飛行した。ハーバー大佐は斯る事あるを豫期して、豫め總ての大砲をターポーリン（帆布製防水用被覆）や木枝を以て被覆し、空中より見へざる樣にした。此等の飛行機は島の北方なるウラノ岬邊にある一小島を攻撃した後、東海岸に沿ふて南行し、アガナの上空を甚だ低く飛んで茲に爆彈數個を投下し、土人の家屋多數を破壞し、又米國人の家屋にも多少の損害を與へた。日本飛行機は航空機射撃砲のあることを知らないので――戰前迄此等の砲がグワム島に無いと云ふ日本

間諜の報告は正確であつたが、彼等は米國運送船が之を運んで來たことを知らなかつたのだ――二千呎の低空を飛びつゝアプラの砲臺を偵察せんとした。これ實に米軍にとり逸す可らざるの好機である。恰も此時アプラには六門の高射砲があつたので一令の下に迅速に射擊を開始した。米軍の砲手は該砲には未熟であつたけれども射擊は精確にして敵機の二機は直に射落され、一機は操縱不能となり、他の只だ一機のみ辛ふじて逃れた。

午前十一時三十分アルタムの哨所は西北方に當り烟の一團見ゆるを報じた。茲に於てハーバー大佐は出來るだけ速に敵の兵力と針路を知らんとして數少き麾下飛行機の一を派遣して之を偵察せしめ、且其操縱者に命ずるに敵飛行機の攻擊距離以外に在て已むを得ざる場合の外之との戰鬪を避くべき旨を以てした。次で來りし無線電話を以てする此飛行機の報告に曰く、『敵艦隊は今殆んど正東に航行しつゝあり、敵は四隻の裝甲巡洋艦、四隻の偵察巡洋艦、約十六隻の驅逐艦、航空母艦らしき物一隻、並に陸軍運

送船と思はるゝ十五隻の汽船より成り、偵察巡洋艦を先頭に、裝甲巡洋艦之に次ぎ、驅逐艦は之と運送船とを掩護(スクリーン)すべき位置に在る。我れ敵高射砲の射擊を受け、且敵飛行機の追擊を受けつゝあり』と。茲に於てハーバー大佐は偵察飛行機を召還したが、數分にして該機は四臺の敵機より猛烈なる追擊を受けつゝ、アプラに向ひ低空飛行を以て歸來しつゝあることが判つた。該機は敵を味方高射砲の射程内に導く樣操縱したので、敵の二機は忽ち射擊を受けて墜落し、他の二機は之を見るや高射砲の正確なる射擊を受くるに先ち踵を回らして遁逃した。

午後零時十五分に至りアルタム山の哨所は敵艦隊の艦影を認めた、此時敵は二隊に分れ、一は東北に向針して、明かにリチヂアン岬を廻り、グワム島の東側に向ふものと思はれ、他の一は正南に向ひ、其目的は西海岸にあるものと思はれた。今や敵は島の東西兩岸に同時に上陸せんとするものなるは疑ひ無い、唯だ疑問とすべきは何れの地點に上陸すべきやである。午後

一時二十分二隻の裝甲巡洋艦淺間及常磐はアブラ港前に來りて港と砲臺に向ひ猛烈なる射擊を開始した、此二隻は前部の八吋砲を十二吋砲に取換へて居た事が後に至りて知られた。日本の飛行機は彈着觀測の任に當り、米軍高射砲の射程外なる高所より一々之を味方に報告した。斯くてオロト岬及スメーの兩砲臺は猛烈なる射彈を受けたが、此等の彈雨の中に在つて僅に一握り程の海兵は砲を有効に操作しつゝ日本の巡洋艦に數彈を命中せしめ、常磐は之が爲に十二吋砲を破壞されて一時戰線外に出た。然るに二十分經たぬ間に二つの砲臺は沈默し、四門の內三門の砲は破壞し、砲員も亦死傷した。アタンタノの上方に在つた第三の砲臺は最近に築設したもので、其位置も亦敵軍の發見を困難ならしむる所に在つたので、其後三十分間は防戰を繼續したが、不幸にも敵の一彈來つて豫備彈藥を爆發せしめ、砲員の多くは之が爲に斃れた。

此時に當り移動重砲に配せられた米軍の海兵等は此の憐れな戰友等を

援助せんとして焦慮しつゝあつたが、バーバー大佐は決然たる命令を下し其の命あるに非んば一彈をも發射させなかつた。チンキオ山上の隱蔽された觀測所に在つた大佐は、やがて日本軍艦の第二隊がタグアン岬を通過して海岸と並行の針路に航行しつゝありとの報告に接した。後數分にして第二の報告は來り、日本の裝甲巡洋艦春日、日進は其十吋と八吋砲を以てタラホホ港を砲擊しつゝあることを報じた。これ卽ち日本軍がアブラとタラホホの兩地に同時に上陸せんとしつゝありとの大佐の信念を確實ならしむるものである。然しながら日本の飛行機が空中に見張りつゝある間は一砲をも動かすことは出來ない、何となれば直に敵の知る所となりて日本飛行機の爆彈か又は巡洋艦の砲火に依り破壞さるゝからである。今や米軍にとりては空中を制することは最も重要であるが、如何にして之を爲すべきやは日本軍の最初の出現時より大佐の頭を惱ました問題であつた。日本軍には航空母艦松島が附ひて居ることは、アブラ沖約十二浬を航

行する時明かに大佐の認むる所となつた。茲に於てか大佐は同艦を攻撃せしめんと決心した、蓋し之を撃沈するか、又は之に重大な損害を與へたならば、其搭載せる飛行機は宿無しとなつて他艦に收容さるゝ爲め海上に着水するか、又は其動力不足して最近距離のサイパンに飛行するの外なく、結局戰場より引揚ぐることゝなるからである。茲を以て大佐は危險を覺悟して麾下の八機に松島を攻撃せんことを命じた。此八機中四機は偵察又は戰鬪機で、殘りは各々六百听の爆彈を有する中型の爆彈投下機であつた。此等は此時迄島の北方なるデデドの格納庫に待命したが、總督の命を受くるや否や直に飛行して決死的任務に就ひた。彼等は松島以外の敵は之を顧みることなく、要すれば戰鬪機は自ら犧牲となりて爆彈投下機の爲に途を開かんことを命ぜられた。此等の飛行機が恰も出發せんとする時隊長デエイ大尉は總督よりの傳言に接した、曰く『貴官若し日本の航空母艦を撃沈するを得ばグワムを救ふことが出來る、されば萬事は貴官の成功如何

に關はつて居る。行け！　貴官の成功を祈る』と。

米軍の飛行機は未だ二千呎の高所に達せざるに早くも日本飛行機の發見する所となり猛烈なる追撃を受けた。然るに米機は幸先好く、且敵機も亦米機の目的の那邊にあるやを知らずして、之を遮斷せんとしなかつたので、遂に松島に達することが出來た。松島は右側に偏して一本の烟突を有する特種の型であるので直に之を識別するを得た。艦上には二三の飛行機が在つたが米機の近くを見るや直に飛行し、且該艦の高射砲も亦米機目がけて發砲したが時機既に遲かつた。松島の廣き甲板は良好なる目標となり、米機は五百呎の接戰距離に於て爆彈の一齊投下を行つた、而して其爆發の猛烈なる米爆彈機の一は其爆風により顚覆して眞逆樣に海上に墜落した位である。米軍の他の爆彈投下機二機も亦日本の追撃機に惱まされたが、遂に松島に近づいて二彈を甲板上に命中せしめ、第三彈は傾ける船體に命中して水線上に爆發し艦側に大なる穴を生ぜしめた。今や松島は火

災と烟に包まれて漸次に傾斜し始め、艦上にあつた一飛行機の如きは爲に海上に滑り落ちた。實に大なる爆彈が機關を破壞し、他の爆彈はフライイングデッキを穿貫して艦内下部のコンバートメント内で爆發したのだ。斯くて松島は僅に十分間にして沈沒した。想ふに舷側に穿たれた大孔に加ふるに他にも重大な浸水個所を生じた爲であらふ。敵に與へ得た此の不意の襲擊の混亂に乘じて米軍の四機は實際上の損害なしにデデドの格納庫に歸還したが、他の四機は此大成功の尊き犧牲となりて、乘員は飛行機と共に永久に太平洋の庭深く沈んだ。生還した米軍四機の内三機は戰鬪機であつたが、此等は新たに爆彈を搭載し終るや否や彈着觀測に任ぜる日本の飛行機を驅逐すべき命を受けて直に出發した。午後三時日本軍の生殘せる一機はアガナに在る高射砲の射擊を受けつゝ、サイパン方面に向ひ北行したが、米軍の四機も亦破壞して、最後の一機はパーリガタの山上に燃へつゝ其餘燼を横へた。

斯くて茲にグワムの空軍は終焉を告げたが、其犧牲は無益で無つた。日本人が航空母艦に加へられた決死的攻擊の意味を正當に評價せなかつたのは其後の事件の進行に依て證せられた。之を爾後の智識より判斷すれば、米軍の飛行機が全滅した後に於ても、グワム島の守備軍は尙敵に對すべき他の手段を有することを念頭に置かなかつたのは奇怪千萬である。併しながらグワム島の防備に關して日本人の得た情報は嚮に記述せる開戰直前に於ける間諜の報告を基礎としたもので、其後二隻の運送船が到着して多數の移動式重砲を陸揚したのを知らなかつたことから判斷すれば、これ亦有り勝ちのことであらふ。午後三時十五分アブラ沖の日本軍艦は砲擊を中止し、數隻の驅逐艦は其防雷掃海機を以て機雷敷設面に通路を開きつゝ港に向つて來た。此等は港口の暗礁や淺洲の間を縫ひ、低速を以て近づき來るので射擊に最良なる目標を呈したが、米軍側は一彈をも放たなかつた。此時驅逐艦ランバートンとライザルはサンタクルーズ島側に何れ

も傾きつゝ甲板上には人も砲も無つたので、日本軍は砲撃の爲に破壞されたか、又は乘員の手に依て自ら沈められたものと考へたに違ひない。陸上の敵が沈默を守るを見るや米軍は遂に最後の抵抗力をも失つたと見て、之に勵まされつゝ九隻の運送船は進航を始めた。運送船の甲板上には陸兵充滿し、端艇は舷側に半ば吊下げられ、數隻の驅逐艦は上陸を掩護せんとして舷側に横付けした。其沖合八浬には裝甲巡洋艦春日あり、常磐と淺間は尙も陸岸近くにあつた。斯くて運送船はキャタランバンクの一浬以內に入るや停止し、陸軍の先頭隊は端艇に乘移り、モーターボートや驅逐艦に曳かれて港內に向つて進んで來た。

此上陸隊が海岸より半浬以內に這入つた時ハーバー大佐は遂に奧の手を出した、卽ちアブラ後方の山中より突如として大砲の砲聲聞へ、續ひて他の砲の齊射となつた、此等の砲は位置の撰定宜しきを得て巧みに隱匿してあつたので海上よりは之を發見することが出來なかつた。先頭の日本運

送船は今や海岸に舷側を向けつゝ熟練なる米軍の砲手に對して良好なる目標を呈したが、米軍の第一彈は其稍々前方の海面に落ち、續ひて放たれた七吋砲彈の爲に船內に爆發起り、其他の運送船も同樣であつた。此時陸上の野砲も亦射擊を開始し、其榴霰彈を以て端艇內に在る人員の半數を數分間內に薙ぎ倒した。今や三隻の運送船は火災に罹り他の者も亦大なる損害を蒙つた。日本の驅逐艦は端舟を掩護せんが爲に大膽にも突進して敵彈の楯となり、連りに不明なる陸上砲臺を盲擊し、其他の大艦も亦總ての砲を以て射擊を行つた。然も陸上よりの射彈は運送船に對する折檻を片時も緩めずして、之を虐殺の檻と化せしめた。重大なる損害を蒙つた三隻の運送船は辛ふじて彈着距離外に出たが、殘りの六隻は憐むべき有樣となり、一隻は驅逐艦に曳航されつゝ沈沒し、此驅逐艦も亦間もなく敵彈を受けて運轉の自由を失つた。常磐は敵彈の爲め戰線外に出で、淺間は前部烟突を吹飛され、春日も亦數彈を蒙つた。斯くてアブラに於ける日本軍の上陸作

戰は全然失敗に終り、午後四時三十分殘れる敵艦も亦同地を引揚げ、米國驅逐艦ランバートンとライザルの端艇は港外に出でて溺死せんとしつゝある日本兵士を引揚げた。運送船と端舟内に於ける慘狀は慘憺たるものであつた。此戰鬪中五千以上の日本軍は戰死し、沈沒を免れた艦船の乘員の大部も亦負傷した。

島の反對岸なるタロホホ港に於ける日本軍の上陸も之と稍々同一の經路を取つた。但し此地に於ける米軍の砲兵は前記のものよりも其數少數であつたが、日本運送船の擊沈されたもの三隻、其他の者も多少の損害を受けて引揚げた。然るに此地では日本の軍艦は始めて重大なる損失を招ひた、卽ち裝甲巡洋艦日進は陸上に砲あるを知らずに不注意にも海岸より三浬以内に近づき、米軍の猛烈なる砲火を受けて五分間内に操縱不能となり、之を曳航せんとて突進せる數隻の驅逐艦が曳索をとる間もなく爆沈した。此地に於ても亦アプラと同樣日本軍艦は陸上の砲臺が砲火を開くや否や

總ての砲を以て之に應戰した。此兩地に於ける米軍の砲兵は實彈發射と同時に烟を生ずる火藥を砲臺より適當の距離に在る數個所に於て定時に發射せしめ、之が爲に生ずる森林や山中より立昇る黃色の烟を以て恰も米軍砲臺の所在なるかの如く日本人を欺かんとした。日本軍艦は之を見るや有ゆる種類の砲を以て之を砲擊し、爲に彈藥の多量を消費したが、事實は擬砲であつたのだ。斯くて日本軍は何れも日沒前沖合に退却し攻擊は旣に中止されたる樣に見へたが、米軍は夜暗に乘じて敵が再び他の海岸に上陸せんことを恐れて夜中砲側に在つた。二十一日の夜は明けて太陽は其笑顏を現はした、然も海上には敵の片影なく、僅に一沫の黑影が朦朧として西北の地平線上に敗殘の敵の退却を示すに過ぎない、實に日本軍は損傷せる運送船の出し得る最大速力を以て臺灣方面に向ひ歸航しつゝあつたのだ。

斯くてグワム島は當分の間は安全となつたが、意氣揚々たる米國の守備

軍は、日本軍が再び捲土重來して之を攻擊すべきは唯單に時日の問題たるに過ぎざるを素より克く知つて居る、況んや其或者が懷しきが如く、日本が次回の攻擊を繰返すに先ち米國艦隊の援軍が東方より來るべしとの豫想の如きも何等根底あるものでない、實に米國の海軍當局はグワムとの通信不可能なる爲め其狀況を知るを得ず、該島は既に日本の手中に歸したものと推定して居たのである。三月二十日附東京政府の無線電信公報に依れば『グワム島の要塞は帝國陸海軍の協同攻擊により陷落せり』と報じて居る、但し此公報が過早であつたのは後に至て知られた。ハーバー大佐は此戰鬪中止の期間を利用して新たに砲を配備し、障害物や塹壕を設け、七吋砲を運搬すべき肯望ある道路を修築した。勿論大佐と雖這回は敵は航空機の多數を伴ふべきを豫期し得るので、米軍が砲火を開くや否や容易に其位置を發見せらるべきを知り、前回の如き成功は到底之を期待し得ざるを熟知して居た。

三月二十二日馬尼剌より來れる五隻の米國潛水艦はアプラに到着し、翌二十三日には他の三隻も亦到着した。此等の潛水艦は既に總ての魚雷を發射し盡し、グワム島にも亦魚雷の豫備は無つた。然るに魚雷を有せざる潛水艦は防禦上何等の效用ともならないので、大佐は右の內六隻の潛水艦に燃料油搭載次第ホノルヽに向ふべきを命じ、驅逐艦ランバートン、ライザル、運送船ニューポートニュースも之と同航せしめた。獨り潛水艦S二十三號、同五十號の二隻はグワム島に殘留せしめ、又運送船ビューフォートは日本軍の第一回の攻擊の際一彈を受けて機關を損傷したので、これ亦グワム島に留めた。而して此等の諸艦は何れも無事ホノルヽに到着した。

四、日本軍のグワム島占領

四月三日日本軍の第二回攻擊は始まつた。此日早朝多數の日本飛行機は島上に現はれ、間もなく六隻の戰艦及遙洋艦並に運送船の一隊が近づい

た。日本軍は前回の失敗に鑒みて新戰術を採り、這回は豫め掩護砲擊を行ふことなく、四隻の運送船はスメーの海岸に陸軍兵を上陸せしめんとして驀地に突入して來た。斯る大膽なる行動に對しては米軍は例へ其砲の所在を敵に暴露するも直に之に砲擊を加ふるの外は無い、何となれば斯くせざれば敵は海岸に地歩を占めて遂に自軍の敗戰となるからだ。玆を以てハーバー大佐は令して隱匿した砲に發射を命じたが、其第一發を發射するや否や、十數機の日本飛行機は高射砲の射擊を犯して來り、恐るべき爆彈を投下した。今や米軍砲臺の所在は日本飛行機の知る所となつたので、沖合に在つた日本軍艦も繼ひて砲臺目がけて瓦斯と高勢の爆藥を有する彈丸を發射した。其射彈は飛行機に依て觀測されたので命中確實少時にして米軍半數の砲は沈默せしめられた。殊に米軍は毒瓦斯に對するマスクを持たなんだので一二の砲臺では砲員は人事不省となり、他の砲臺は日本の高勢爆藥彈の爲に破壞された。今や米軍の防禦砲火は衰へ、日本軍に危害

を與ふること少ひので、尙多數の日本運送船は港內に進んだ。午前十一時三十分先頭運送船よりの陸軍兵は端艇に乘移りて曳航されつゝ海岸に向ひ、正午迄に數千の兵は上陸し、オロテの森林を經てアプラ方面へと進軍した。ハーバー大佐は島の東海岸には敵上陸せずと見るや、タロホホ附近の山に在つた數門の七吋砲に西海岸方面の砲臺を援助せんことを命じた。然るに該砲一度動くや日本の飛行機は來つて爆彈を投下し、軍艦も亦之に對して射彈を送つた。斯くて此等の七吋砲は一部は爆彈や敵砲火の爲に前車を破壞されて砲の運搬不可能となり、他は砲員全部を殺傷して遂に一門の砲もアプラに達することが出來なかつた。指揮官オリバー大尉は運搬不可能なりと見るや、敵手に落ちざらんが爲め之が破壞を命じ、日本飛行機の妨害を冒して之を遂行した。

斯くて三日未明には島の南半は日本軍の手に落ち、守備軍の殘部は北方に退却し、森林中に隱れて日本飛行機よりの危害を免れた。此夜ハーバー

大佐は生存せる三名の士官と協議し、爾後の抵抗は到底不可能なるを認め、頗る優勢なる敵に對して勇敢に戰つた部下の生存者を救助せんが爲め涙をのんで降伏するの外なしと決心した。茲を以て此朝一百にも滿たざる米軍は平地に集り、日本飛行機の面前に武裝を解ひた。之を見たる日本飛行機は直に之を司令部に報告し、二時間後には日本歩兵の一隊は該地に來り、此等の捕虜を占領軍總司令官荒川大將の司令部なるアガナに護送した。同司令官は既にアガナ市を占領して鬱の總督官邸を司令部として居たのである。大將は非常なる禮儀を以てハーバー大佐を迎へ、部下の勇戰を賞讃し、且一同には良好の取扱を爲すべき旨保證した。

然るにハーバー大佐は天彼に幸にして其後間もなく捕虜より逃るゝことを得た。六日大佐と部下の米國將校二名は日本に送らんが爲め驅逐艦荻に乘せられた。然るに該艦は未だ二十浬も航行せざるに米國潛水艦S五十號より發射せる一發の魚雷の爲に數分にして沈沒した。米國潛水艦

は沈沒しつゝある荻の極近くの水面上に浮出したので、ハーバー大佐は之に泳ぎ付きて收容された。此時大佐と共に在つたシュリーナー大尉も同樣に救出されたが、他の一名の米國士官は遂に發見されなかつた。恐らく水中に沈んだものであらふ。然るに日本の飛行機が來たのでS五十號は潛入し、尙も數日間グワム附近に在つて日本大艦の一を狙つたが遂に其機會を得ず、偶ま燃料不足せんとしたのでホノルゝに向ひ航進した。僚艦S二十三號は遂に同地に到着せず、其消息は杳として知れなかつた。恐らく不時の事變か又は日本の島嶼附近で機雷に罹りて沈沒したものであらふ。斯くて茲に日本軍は完全にグワム島を占領し終つた。

第七章　グワム陷落後の對勢

グワム陷落後の戰略上の對勢――米國の侵蝕なる經濟的位置――米國の海上貿易に對する日本の作戰

一、グワム陷落後の戰略的對勢

四月四日のグワムの陷落は恰も開戰後一ヶ月の出來事である。此開戰初頭に於ける戰爭の進行を見るに、米國の戰略家等が常に其國民に警告したるが如く、西太平洋に於ける遠隔の諸島嶼は現狀に於ては日本の攻擊に對抗するを得ないので、開戰後間もなく敵手に落つべしとの判斷の正確なりしを證明した。斯の如く此の重大なる不幸は事前に先見され、然も輕視されたにも拘らず、米國と外國に於ける其陷落の無形的影響は頗る大なるものがあつた　日本が之を占領せんとして拂つた莫大なる損害は此時迄

未だ世界に知れて無づたので、一般の見解は日本の損害は輕微なるものと考へられた、否日本の公報でさへ之を正確に報ぜなかつたのだ。然るにハーバー大佐がS五十號に乘じてホノルヽに到着するや、グワムの勇敢なる防戰の眞相が判り、日本軍の第一回攻擊と比島を占領せんとする日本軍の上に加へた損害とを潛水艦や驅逐艦の士官連より聞くに及んで、米國人は歡呼を以て之を迎へ、爲に海軍に於ける相次で起つた醜の不幸に失望して、多くの人士が懷抱した、日本人は打勝つ可らずとの信念が消滅すると同時に、米國の當面せる任務の然く恐るべきものに非るを自覺するに至つた

抑も日本の兵力が絶大なることは明かで、其陸海軍の能率は高く、其將卒は勇敢を以て聞へて居る。況んや其背後には團結せる國民の集團ありて、數週間前迄は日本を內亂の巷に陷れんとした一派の政治的團體も今は政府との間に休戰が成立し、武器を取つて起たんとは國民の有ゆる階級が直に之を唱和した所である。政府は更に社會主義者の平和的運動を豫想し

て之が豫防策を講じたが、此等は總て無益であつた。蓋し此等社會主義者の領袖等は二三の重要ならざる者を除き無條件にて政府を支持したからである。加之ならず國民の結合は更に政治上の囚人を特赦するとの公表に依て一層增進せしめられた。其如何に國民の結合が堅固であつたかは其後三月に至り發布せられた有名なる『日本國民に檄す』てふ檄文に於て、米國の不當にして忍ぶ可らざる攻擊に對し、日本は已むを得ず防禦の爲め劍を取て起つに至れりとの理由を長々しく揭げたものに見るも明かである、實に此檄文には日本各階級の名士一百名の署名あり、其中には六名の社會黨領袖も加はつて居た。即ち少くも當時は日本の民衆は有ゆる階級を通して戰爭に對し强固な團結を示して居たのである。

加之ならず日本は今や展開しつゝある所の戰略的鬪技に於ても有ゆる勝利を占めつゝある樣に見へた。日本は距離の長遠に基き米本國に對して有効なる打擊を加ふるを得ないが、僅か數週間內に比律賓とグワムを奪

取して其作戰目的を達し、戰域附近に於ては現實的にも可能的にも敵をして一の海軍根據地なきに至らしめた。然らば日本の採るべき次の行動は如何？。日本は此初期の成功に滿足し、己の位置の不可侵を確信しつゝ、敵が四千浬の海上を航破して來襲し得ると假定して、靜に其反擊を俟つか、或は又其軍事上の熱情が政策上の理由に後援されて、布哇又は米本國迄も進んで出擊するであらうか？。此疑問に對して米國の輿論は寧ろ後者に傾ひた、蓋しこれ有力なる理由を有するものと見られたからである。米國の如き恐るべき敵との長期の戰爭が日本に對して如何なる結果を齎らすべきか、將又既に與へ得たる打擊が米國をして和を乞はしむるに充分なりや否やは素より日本政治家の熟知する所である。實に日本にして最後の勝利を收めんとならば尙一層の努力を必要とすべく、然も萬事は迅速なる行動の必要なるを指示した。見よ米國の兵力は月を重ぬるに從て累加し、與ふるに充分なる時日を以てせんか壓倒的優勢の艦隊を建設し、數百萬の陸